

下田歌子の『和文教科書 六之巻 更科日記』

— 解題・翻刻 —

久保 貴子

下田歌子の活動範囲は多岐の分野にわたるが、その教育活動は、前後二期に分けて考えることができる。つまり、上流階級の女子のための教育活動期（一八八一年頃～一九〇七年までの二十六年間）を前半、一般女子のための教育活動期（一八八八年～一九三二年頃までの約三十四年間）を後半とし中間に相互に重なる期間ほぼ十年がある¹。教育の対象を、女子としたうえで、伝統的な和歌や仮名文の学習を重んじる点に下田歌子の特徴がある。

一八八四（明治十七）年七月宮内省御用掛を拝命し、翌一八八五（明治十八）年十一月に開校した華族女学校では、幹事および教授兼学監に任じられた²。『和文教科書』「一之巻」巻頭には、開校直後の十二月という早い段階での学校長・谷干城の序文が置かれることから、むしろ開校にあわせて、この教科書の編纂が目論まれ、刊行へむけて着々と準備を整えていたと考えるよいであろう。すでに私立「下田学校」（のちに私立「桃天学校」に改称）を創

立し³、女子を対象とした教育を開始していたものの、新たに、当時宮内省所轄の公的な官立学校へとその教育実践の場を移すことは、下田の教育者としての立場を大きく変えることになったと思われる。その両肩にかかる責任も増大したことであろう。下田の教育姿勢を明確にし、その決意の表れを如実に窺い知ることが出来る第一歩として、この『和文教科書』の編纂は位置づけられる。下田は以下のとおり、その後も教科書の編纂に携わっていくが、その最初に編まれた教科書としての意義は大きいと思われる。下田が編んだ教科書類を列記する。

1 『和文教科書』全三冊（一八八五年十二月）宮内省蔵版（のち版元を変更しつつ全十冊）⁴

2 『小学読本』八巻全九冊（一八八六年三月～一八八七年四月）

十一堂

- 3 『家政学』全二冊（一八九三年四月）博文館
- 4 『新撰家政学』全二冊（一九〇〇年九月）金港堂
- 5 『女子用文習字帖』全二冊（一九〇二年二月）博文館
- 6 『女子歴史教科書』全二冊（一九〇三年二月、三月）文学社
- 7 『監修日本女子読本』全八冊（一九一九年十月）明治書院

下田歌子が最初に編纂した『和文教科書』は、袋綴に装丁された全十巻の版本である。「一之巻 徒然草ぬきほ」、「二之巻 徒然草ぬきほ」、「三之巻 いさよひの日記 阿仏」、「四之巻 から物語ぬきほ」、「五之巻 方丈記 鴨長明」、「六之巻 更科日記 菅原孝標女」、「七之巻 宇治拾遺物語ぬきほ」、「八之巻 宇治拾遺物語ぬきほ」、「九之巻 土佐日記 紀貫之」、「十之巻 竹取物語」で構成されている。当初は「宮内省蔵版」として全三冊で刊行された。この刊行をめぐっては、既に前稿「下田歌子の『和文教科書』考 「六之巻 更科日記」を中心に」、⁵『続 下田歌子の『和文教科書』考——「三之巻 いさよひの日記」を中心に——』⁶において論じており、今再び触れることをしないが、その後も重版、続刊がなされている。刊行から半年後の一八八六（明治十九）年三月十九日の「東京日日新聞」には早くも「今日女子の品位を高尚にし智徳の両育をさかりにすべき時にあたりてその基礎となるべき教科書にかゝる書どもを用いてはいかでか宜しからん」として「皇后宮今年二月華族女学校に行啓あらせ玉へる日在校の生徒を召され此書を下し賜はせられきされば今の世に師範学校中学校

等にて和文の指南として用ふべき者此書をおきては何かあるべき」との広告宣伝文が載っている。⁷『国語教育史資料第二巻 教科書史』には、この『和文教科書』は「高等女学校用」の教科書に分類され、「例言」を全文引用したうえで「わが国の女子教育の国語教科書として初期のものであり、編者が女子自身という点など注目すべき教科書である。」との解題が記載されている。

その一方で、現時点においては、この『和文教科書』は絶版であり、一部のデータ画像を除き入手しがたいものとなっている。今後、全巻を紹介する必要がある資料である。まずその端緒として、本稿では、「六之巻 更科日記」を翻刻し紹介することとした。本学図書館には、その整版の下原稿となつたと思われる下田の自筆原稿が残されている。その意味でも貴重であるが、『更科日記』（作品としてはこの表記に統一する）が一八八七（明治二十）年という段階で教科書に採録されたという点にも『更科日記』の享受史、研究史を考える上でも重要な意義が見出されるように思われる。

『更科日記』の最善本とされる藤原定家自筆御本は、享受の過程で著しい錯簡が生じたことが知られている。一九二四（大正十三）年八月一日玉井幸助・佐々木信綱両氏により、錯簡が生じていたことが発見され、現在のような順序に本文が正された経緯がある。この『和文教科書』に所収される『更科日記』本文は、錯簡が指摘される以前のものであり、錯簡のままの本文を採用して校訂を加え、さらに注を施している。研究史に照らしても、錯簡

によって本文が訂正される以前に『更級日記』に着目した、先駆的な業績である。近代の『更級日記』研究はまさに錯簡の修正によって正しい順序で読まれるようになったことから始まったと言つてよい。それだけではなく、錯簡の修正は江湖の読書家の関心も集めることになった。『更級日記』の世界を小説に昇華した、有名な堀辰雄の『姨捨』(一九四〇・昭和十五年)も、錯簡が正された後のものである(堀辰雄には他に『姨捨の記』など)。近代の本格的な作品への言及と研究は錯簡修正後に始まったのである。一九四三(昭和十八)年には、中等学校の国定教科書である文部省編『中等国文(女子用)』に「あづまぢ」の題の下で『更級日記』が『十六夜日記』とともに採られるにいたつたのも、錯簡修正後の『更級』への注目の高さを証し立っている。一方で下田の『和文教科書』はその修正前に『更級日記』に着目した上に教科書にまで採用している点で、必ずしも多くはない明治期の『更級日記』享受を考える上で、画期的な仕事であつたと言えるだろう。江戸時代の『更級日記』享受は錯簡を抱えたままの本文で行われていたが、『更級日記』は愛すべき小品として読まれていたようで、その作品を教科書に採用するところに下田の豊かな教養と確かな眼が確かめられるだろう。実際に『更級日記』は現在、押しも押されぬせぬ定番教材として高等学校の古典の教科書に採用され続けており、下田はその先駆とも言い得るであろう。

本学図書館蔵の自筆原稿(出納番号0192)は「宮内省用箋」一面二十字×十行の原稿用紙六十九枚(表紙一枚、本文原稿六十八

枚)を用い本文・頭注を墨筆、句読点や訂正箇所などを朱筆で記されている。『和文教科書 六の巻 さらしな日記』(外題)とする紙表紙のおそらくは補強目的で近年施された袋綴装(五目綴)である。¹⁰「桃天学校教科書表(和歌文科ノ部)」を参照すると『古今集』源氏物語』他、概ね江戸期の版本を作品ごとに使用していたことが窺えるが、¹¹このことからアンソロジーとしての形態を持った、新しい教科書を出版する必要性を感じたものと思われる。先述したように『更級日記』の版本は、元禄十七年絵入り版本、西門蘭溪校天保九年版本、群書類従本などが出版されていて、錯簡という本文上の傷を持ちつつも広く読まれていたことがわかる。江戸名所図会には、済海寺を『更級日記』に登場する竹芝寺の旧址とする記述が存在するなど、江戸時代の人々にも知られた作品であつた。下田がどのような本文(版本・写本)にもとづいて、和文教科書の校訂本文を作成していたかは正確に確かめることはできないが、江戸時代の版本、特にその一致するところの多さから群書類従本を座右において参看していたことが推察される。群書類従本は御物本を祖とする古写本に屋代弘賢所持本と扶桑拾葉本を参看しながら校合本文を作り上げていて、錯簡を除けば、現代の水準の本文に近い。下田が教科書のために作成した校訂本文が群書類従本に近いのも得心がいくところである。それだけではなく、華族女学校には古写本(これも御物本を祖とする本であろう)も存在していたようで、これを下田が参看した可能性も考えられて良い。¹³また、下田が思考を重ねた状況は、書き入

れられた頭注などから推察でき得るが、これらの詳細については前稿をご参照いただきたい。¹⁴

なお、御物本など諸本に見られる奥書や、群書類従本の官位などの行間細注などのほとんどが省略されていて、教科書であるという本文読解の目的意識が明確にされている。句読点、濁点の多用もそのためと考えられ、このことが読解を助けることに繋がったと思われる。定家仮名遣いを歴史的仮名遣いに改める箇所が見することも同様の意図であろう。

注

- 1 西村絢子「近代女子教育の開拓者 下田歌子」(『別冊歴史読本 明治・大正を生きた一五人の女たち』新人物往来社、一九八〇年四月) 創立二二〇周年記念『実践女子学園史一九九九―二〇一八』(実践女子学園、二〇二〇)
 - 2 注2に同じ
 - 3 下田歌子研究所年報「女性と文化」(第1号、二〇一五) 注4に同じ。
 - 4 実践女子大学下田歌子記念女性総合研究所「年報」(第5号、二〇一九)
 - 5 注6に同じ。
 - 6 井上敏夫編、東京法令出版、一九八一
 - 7 玉井幸助『更級日記錯簡考』育英書院、一九二五。
 - 8 注9に同じ。
 - 9 注9に同じ。
- なお、「明治以後出版せられた主なるものは次の如くである。」として「和文教科書六の巻 下田歌子氏編 明治十九年宮川保全発行」を頭に「国文叢書本 大正三年博文館」までの十冊を記述している。ここから、下田の本書が明治期の先駆的著作であることが諒解さ

れる。

注4に同じ

10

『実践女子学園一〇〇史』(実践女子学園、二〇〇一)

越前勝山藩主小笠原家の侍医の家に生まれるも歌人として名高い。

清水浜臣門下。著書に『万葉草木考』などがある。

11

国立国会図書館蔵鳥山本『更級日記』(請求記号101-3)には華族女

学校蔵写本を校合した書写奥書がある(津本信博『更級日記の研究』

早稲田大学出版部、一九八二)。あるいは、焼失したと思われるこ

の本を下田が参看していた可能性も考えられる。なお、鳥山本は一

八九三(明治二十〇)年に書写された(書写奥書)が前記華族女学校

蔵本とともに、下田歌子の『和文教科書 六之巻 更科日記』も参

看していたことが明記されている。下田の『和文教科書』本文が貴

重なテキストと受けとめられていたことが確かめられる。

注4に同じ

14

以下に実践女子大学図書館蔵本の簡略な書誌事項を示すこととする。

実践女子大学図書館蔵『和文教科書 更科日記 六卷』（出納番号 ST5.9-S151-G）

一冊。袋綴装。二三・三糎×一五・五糎。香色。「中央堂」の空押模様紙表紙。外題、表紙左に短冊型紙、子持梓刷題簽一六・五糎×二・五糎を貼付「和文教科書 更科日記 六卷」。内題一丁表一行に「和文教科書六之卷」、二行に「美濃 源歌子 編輯」、三行に「更科日記 菅原孝標女」。料紙、楮紙。前後遊紙なし。墨付六十五丁。頭注四十一箇所。每半葉十行、一行二十字内外。和歌は二字下げ一行書き。

刊記

明治十九年十二月十七日版權免許

和文 第三帙

第壹帙 定価金五十銭

第二帙 定価金五十銭

同 二十年一月 出版

第三帙 定価金五十銭

第四帙 定価金五十銭

同二十一年十一月十六日訂正印刷再版

編者 下田歌子

東京四谷尾張町九番地

発行兼 宮川保全

印刷者 東京神田日本橋区通塩町八番地

発行所 中央堂

右 同 所

印記

「実践女子大学図書館印」の長円形単郭朱印（六十五丁表左下）、
「下田歌子資料」の長円形単郭朱印（六十五丁裏左下）。

凡例

- 一、実践女子大学図書館蔵『和文教科書 更科日記 六卷』一冊を底本として翻刻する。
- 二、丁は、墨付を以つて数え、丁移りは「」として示し、その下の（）内に丁数を記す。
- また、表裏は同じ（）内にオまたはウと省略し、片仮名で記す。但し、表紙・見返しの場合は、その旨を「下の（）内に記し、丁数には含めない。
- 三、改行は、原則として底本のままとする。和歌は、二字下げに統一して翻字する。
- 四、翻刻は、底本に忠実なるを旨とし、不審の箇所があつても、みだりにこれを改めることはしなかつた。
- 五、反復記号などは原則として可能な限り底本のままとする。
- 六、頭注は、底本の該当する箇所に可能な限り忠実に記した。
- 七、翻刻にあたり、本文の特質を考える一助として、錯簡修正以前としては最も水準が高い校合本文の一つである群書類従本との校異を欄外に示した。ただし、教科書にふさわしく、

定家仮名遣いを歴史的仮名遣いにあらためた箇所や漢字の送り仮名を加えた箇所については、かえって煩雑な印象を与えることを怖れ、異同は記さなかった。該当する箇所がない場合は「ナシ」と表記した。また、その異同箇所について必要に応じて定家筆御物本の校異を併せて付記した。略号は、「御」とする。群書類従本と御物本との異同で和文教科書本文の字句が略されている箇所は空欄とし、くゝを付してこれを示した。なお前述したように、本文は錯簡の生じた本文に基づいているので、現行の錯簡修正後の本文の順番とは異なっている。そのため①く④の通し番号を付すとともに、現行の正しい続き具合を注記することで、理解の助けとした。

和文教科書 更科日記 六卷

〔表紙〕

〔白紙〕

〔見返し〕

和文教科書 六之卷

美濃 源歌子 編輯

更科日記¹

菅原孝標女

此日記は、誤脱多く、異本ども、かれこれ見あはせたりしかども、猶こほといふべきは、見いでねども、此頃の、文章のすがたを見んに、便りともなりぬべければとて、斯くは、編み入れたるなり。

東路の、道のはてよりも、なほ、おくつかたに、おひ

いでたる人、いかばかりかは、あやしかりけむを、

いかに、思ひはじめけることにか、世の中に、物が

たりといふ物の、あんなるを、いかで、見ばやお

もひつゝ、つれぐゝなるひるま、よひあなどに、姉継²

母などやうの、人々の、その物がたり、かの物がた

〔二・オ〕

り、光る源氏の、あるやうなど、ところぐゝ、かたるを

さぶらふなるの下には、を。文字のあるべきを省けり。

聞くに、いとゞゆかしきさまされど、わが思ふまゝ、

に、そらに、いかでか、おぼえかたらむ。いみじく心

もとなきまゝに、とうしんに、薬師仏をつくり

て、手あらひなどして、人まに、みそかにいりつゝ、

京に、とくあげたまひて、物がたりの多くさぶら

ふなる、あるかぎり、見せ給へと、身をすてゝ、ぬか

をつき、祈り申すほどに、十三になる年、のぼらん

とて、九月三日、かどてして、いまたちといふ、所に

うつる。年ごろ、遊びなれつる所を、あらはに、こぼ

〔二・ウ〕

ちちらして、たち騒ぎて、日のいりぎはの、いとす

ごく、霧りわたりたるに、車にのるとて、うち見やり

たれば、人まには、参りゝ、ぬかをつきし、薬師仏

1 さらしな日記 「御」更級日記
2 に ナシ

見すて奉るの
下には、が文字
のあるべきを、
省けり。

の、立ちたまへるを、見すて奉る、悲しくて、人しれ

ず、うちなかれぬ。かどてしたる所は、めぐりなど

もなくて、かりそめのかや屋の、葎などもなし。す

だれかけ、幕などひきたり。南ハはるかに、野のか

た見やらる。東西は、海近くて、いとおもしろし。夕

霧たち渡りて、いみじうおかしければ、あさいな

どもせず。かたぐ見つゝ、こゝをたちなんことも、
「(二・オ)

あはれにかなしきに、同じ月の十五日、雨かきく

らしふるに、さかひをいでゝ、下野の国の、いかた

といふ所に、とまりぬ。家なども、うきぬ5ばかりに、

3 下野 「御」しもつけ
4 「御」いほ
5 る

雨ふりなどすれば、おそろしくて、いもねられず。

野中に、岡だちたる所に、たゞ木ぞ三つたてる。7其

日は、雨にぬれたる物どもほし、国にたちおくれ

たる、人々まつとて、そこに、日をくらしつ。十七日

のつとめてたつ。昔、下総の国に、まのゝ長といふ

人、住みけり。引布も、千むら万むら、おらせ、さらさ

せけるが、家の跡とて、深き川を、船にて渡る。昔の、
「(二・ウ)

門の柱の、まだ残りたるとて、おほきなる柱、川の

中に、四つ立てり。人々、歌よむを聞きて、心のうち

に、

6 をり
7 所に
8 「御」を

くちもせぬ、この川ばしら、残らずば、昔の跡

を、いかでしらまし、その夜は、くろどの浜といふ

所に、とまる。かたつかたは、広浜なる所の、すなご、

はるくくと、白きに、松原しげりて、月いみじうあか

きに、風の音も、いみじう心ぼそし。人々、おかしが

りて歌よみなどするに、

まどろまじ、こよひならでは、いつかみん、く
「(三・オ)

ろどの浜の、秋のよの月、そのつとめて、そこをた

ちて、下総の国と、武蔵¹⁰の境にてある、ふとみ川と¹¹

いふ、かがみのせ、まつさとの、わたりの津にとま

りて、夜ひとよ、舟にて、かずく¹²物などわたす。乳母

なる人は、男なども、なくなして、さかひにて、子う

みたりしかば、はなれて、べちにのぼる。いと恋ひ

しければ、いかまほしく思ふに、せうとなる人、い

だきて、ゐていきたり。みな人は、仮初の、かりやな

どいへど、風すさまじく、ひきわた¹³なども、しなど¹⁴
「(三・ウ)

したるに、これは、男などもそはねば、いとてはな

ちに、あらくしげにて、苦といふものを、ひとへ、打

11 10 9
〔御〕山
〔御〕と
ひと井がは

15 14 13 12
かつく
〔御〕く
〔御〕し
も ナシ
〔御〕も ナシ
かつく
〔御〕かつく

ふしたるの下
には、を。文字の
あるべきを省け
り。

ふきたれば、月残りなく、さし入りたるに、紅のき

ぬ、うへにきて、打なやみてふしたる。月影、さやう

の人には、こよなく過ぎて、いと白く、清げにて、珍

らしと思ひて、かきなでつゝ、うち泣くを、いとあ

はれに、見すてがたく思へど、急ぎゐて、¹⁶ ゆかるゝ

心地、いとあかずわりなし。佛に、おぼえて、悲しけ

れば、月の興もおぼえず、くんじふしぬ。つとめて、

舟に車かきすゑて、渡して、あなたのきしに、車ひ

きたてゝ、おくり¹⁷にきつる人々、これより、みな婦

〔四・オ〕

りぬ。のぼるは、とまりなどして、いき別るゝほど、

行くもとまるも、みななきなどす。をさな心地に

も、あはれにみゆ。今は、武蔵の国になりぬ。ことに、

おかしき所も見えず。浜も、すなご白くなどもな

く、こひぢのやうにて、紫おふと、聞く野も、蘆荻の

み、高くおひて、馬にのりて、弓もたるすゑ、見えぬ

まで、たかく生ひしげりて、中をわけ行くに、たけ

しばといふ寺あり。はるかに、¹⁸ いくさらふ¹⁹といふ所

の、ろうのあとの柱礎など、あり。いかなる所ぞと

とへば、是は、いにしへ、竹芝といふさかなり。国の人

〔四・ウ〕

のありけるを、火たき屋の、ひたく衛士に、さし奉

17 16 わかるゝ心地 〔御〕いかるゝ心地
はへ

19 18 いゝさらふ 〔御〕はゝさらふ
な

ひたえは、直柄
にて、すぐにす
げたる、柄なり
とぞ。

りたりけるに、御前の庭をはくとて、などや、苦し

きめを、見るらん。わが国に、七つ三つ、²⁰作りすゑた

る酒壺に、さし渡したるひたえの、ひさごの、南風

吹けば、北になびき、北風ふけば、南になびき、西吹

けば東になびき、東ふけば、西になびくを見て、か

くてあるよと、ひとりごち、つぶやきけるを、その

時、帝の御むすめ、いみじうかしづかれたまふ、たゞ

ひとり、御簾のきはに、立いでたまひて、柱により

かかりて、御覧するに、此男の、かくひとりごつを、

「(五・オ)

いと情れに、いかなるひさごの、いかに靡くらん

20 七三 〔御〕七三

と、いみじう、ゆかしくおぼされければ、みすおし

あけて、あの男、こちよれと、めしければ、かしこま

りて、高欄のつらに、まゐりたりければ、いひつる

こと、今ひとかへり、我にいひて、聞かせよと仰せ

ければ、酒壺の事を、いまひとかへりまうしけ

れば、我ゐていきて、見せよ。さいふやうありと、仰

せられければ、かしこくおそろしく、²¹思ひけれど

さるべきにやありけむ、おひ奉りてくださるに、²²び

んなく、人おひて来らむとおもひて、その夜、瀬多

「(五・ウ)

の橋のもとに、此宮を、すゑ奉り、せたの橋を、ひと

22 21 〔御〕と
〔御〕ろんなく

逃げゝるの下
には、よ。文字の
あるべきを省
けり。

まばかりこほちて、それをとびこして、この宮を、

かきおひ奉りて、七日、七夜といふに、武蔵の国に、

いきつきけり。帝、后、みこうせたまひぬと、おぼし

まどひ、もとめたまふに、武蔵の国の、衛士の男な

ん、いとかうばしきものを、頭にひきかけて、とぶ

やうに逃げゝると、まうしいでゝ、この男を、尋ぬ

るになかりけり。ろんなく、もとの国にこそ、行く

らめと、おほやけより、使ひくだりておふに、せた

の橋のこぼれて、え行きやらず。三月といふに、武

〔六・オ〕

蔵の国に、いきつきて、この男を尋ぬるに、此皇子、

おほやけづかひをめして、われ、さるべきにや有

りけん、この男の家、ゆかしくて、ゐて往けといひ

いかにとあれと
は、一本に、いか
てあれとも
あれども、事の
意きこえがた
し。前後に脱文
あるべし。

しかば、ゐて来たり。いみじく、こゝ、ありよくおぼ

ゆ。この男、罪²³しれうぜられば、我はいかにあれと、²⁴

これも、さきの世に、此国に、跡をたるべき、すくせ

こそありけめ。はや帰りて、おほやけに、此よしを

奏せよと、仰せられければ、いはんかたなくて、の

ほりて、帝に、かくなん有りつると、奏しければ、い

ふかひなし。その男を、つみしても、今は此宮をと

〔六・ウ〕

りかへし、都に、かへし奉るべきにも、あらず。たけ

しばの男に、いけらん世のかぎり、武蔵の国を、あづ

けとらせて、おほやけごともなさせじ。たゞ、宮に、

24 23 罪しにうせられば。
て 「御」て

すませ奉りける
家をの、家は、
誤りならん。な
くて、よき所な
り。

その国を、あづけ奉らせたまふよしの、宣旨、下り

にければ、此家を、内裡のごとく、造りて、すませ奉

りける家を、宮など、うせたまひにければ、寺にな

したるを、たけしば寺といふなり。その宮の、うみ

たまへるこどもは、やがて武蔵といふ姓を、えて

なんありける。それより後、火たきやに、女はゐる

なりとかたる。野山、蘆荻の中を、分くるより外の

ことなくて、むさしと、さがみとの中に、²⁵あすた

川²⁶あり。²⁷在五中将の、いぎこととはむとよみけ

る、わたりなり。中将の集には、すみだ川とあり。舟

25 有て 「御」あて
26 といふ 「御」といふ
27 あり ナシ 「御」あり ナシ

見えぬのぬは、
ずのあやまり
なるべし。ぬに
ては、てにをは
調ひがたし。

にてわたりぬれば、相模の国になりぬ。にしとみ

といふ所の山、ゑよくかきたらん、屏風を、たて並

べたらんやうなり。かたつかたは、海浜のさまも、

よせかへる、波のけしきも、いみじうおもしろし。

もろこし河原といふ所も、すなごの、いみじう白

きを、二日三日ゆく。夏は、倭なでしこの、濃く薄く、錦

をひけるやうになん、咲きたる。これは、秋の末な

れば、見えぬといふに、なほ、所々は、打こぼれつゝ、

あはれげに、咲きわたれり。もろこし河原に、倭な

でしこしも、咲きけんこそなど、人々をおかしがる。

足利山といふは、四五日かねて、おそろしげに、く

らがり渡れり。やうくいりたつ、麓のほどに、空のけ

しき、はか／＼しくも見えず。えもいはず、し

げりわたりて、いと怖ろしろしげなり。麓にやどりた

る所に、²⁸月もなく、暗き夜の、やみにまどふやうな

るに、あそび三人、いづくよりともなく、出で来た

り。五十ばかりなるひとり、二十ばかりなる、十四

「(八・オ)

五なるとあり。庵のまへに、²⁹からかさをさゝせて、

居多たり。男ども、火をともして見れば、昔こぼた

といひけんがまごといふ。髪いと長く、ひたひ、い

とよくかゝりて、色白く、きたなげなくて、さても

有りぬべき、下づかへなどにも、ありぬべしな

※
まごといふの
下には、脱文あ
るべし。ものと
いふ語どもを
や、添ふべから
ん。

28 「御」所 ナシ

29 ※ 傘 頭注 訂正再版本 ナシ

ど、人々あはれがるに、声、すべて似るものなく、

空にすみのぼりて、めでたく、歌をうたふ。人々、い

みじう憐れがりて、けちかくて、人々、もて興ず

るに、³⁰西国のあそびは、えかゝらじなど、いふを聞

きて、難波わたりにくらぶればと、めでたくうた

「(八・ウ)

ひたり。見るめのいときたなげなきに、声さへ、似

る物なく歌ひて、さばかり、恐ろしげなる山中に、

たちて行くを、人々、あかず思ひて、皆泣くを、幼な

き心地には、まして、此やどりを、たゝんことさへ、あ

かずおぼゆ。また、暁より、足柄をこゆ。まいて、山の

30 こし

あるの下には、
を。文字のある
べきを、省けり。

流れたるの下に
も、を。文字の
あるべき省
けり。

中のおそろしげなる事、いはむかたなし。雲は、あ

しの下にふまる。山のなからばかりの、木の下、

わづかなるに、あふひの、たゞみすぢばかりある³¹、
³²、

世ばなれて、かかる山中にしも、生ひけんよと、人

々あはれがる。水は、その山に、三所に流れたる。か³³
「(九・オ)

らうじて越えいで³⁴、関山にとどまりぬ。これよりは、

駿河なり。よこはしりの、関のかたはらに、岩つぼ

といふ、ところあり。えもいはず、おほきなる石の、

よはうなる中に、穴のあきたる中より、いづる水

の、きよくつめたき事かぎりなし。富士の山は、此

国なり。わが生ひ出でし、国にては、西おもてに、見

えし山なり。その山のさま、いと世に見えぬさま

なり。さまことなる、山のすがたの、こんじやうを、

ぬりたるやうなるに、雪の、消ゆる世もなく、つも

りたれば、色こきぎぬに、しろき相、きたらんやう
「(九・ウ)

に見えて、山のいただきの、すこしたひらぎたる

より、烟は、立ちのぼる。夕暮は、火の、もえたつも見

ゆ。清見が関は、かたつかたは、海なるに、関屋ども、

あまた有りて、海まで、くきぬきしたり。けぶりあ

ふにやあらむ、清見が関の、波もたかくなりぬべ

し。おもしろき事、かぎりなし。田籠の浦は、波た

み ナシ

〔御〕な

〔御〕を

34 33 32 31
越へてく、

かくて、船にてこぎめぐる。大井川といふ、渡りあ

り。水の、世の常ならず、すりこなどをこくてなが

したらんやうに、白き水、はやくながれたり。ふじ

川といふは、富士の山より、落ちたる水なり。その

〔十・オ〕

国の人の、出でゝかたるやう、ひととせ頃、物にまか

りたりしに、いとあつかりしかば、此水のつらに、

やすみつゝ、見れば、川上のかたより、黄なるもの

流れきて、物につきて、とゞまりたるを見れば、ほ

ぐなり。とりあげて見れば、黄なる紙に³⁵して、濃く

うるはしくかゝれたり。あやしくて見れば、来年、

かみなしては、
守なくてを、写
し誤れるにも
やあらんか。此
わたり、誤脱あ
るべし。

なるべき国どもを、除目のこと、みなかきて、此国、

来年あくべき³⁶にも、かみなして、又そへて、二人を

なしたり。怪しあさましと思ひて、とり上げて、ほ

してをさめたりしを、かへる年のつかさめしに、

〔十・ウ〕

この文に、かゝれたりし、ひとつたがはず、此国の、

守とありしまゝなるを、三月のうちに、なくなり

て、又、なりかはりたるも、この傍らに、かきつけら

れたりし、人なり。かゝることなむ有りし。来年の、

司めしなどは、ことし、此山に、そこばくのかみぐゝ、

あつまりて、³⁸ないたまふなりけりと、見たまへし、

35 「御」に

38 37 36
事
に ナシ
て ナシ

渡したりしの下には、が文字のあるべきを省けり。

珍らかなる事に、さぶらふと³⁹かたる。ぬまじりと⁴⁰

いふ所も、すがくとすぎて、いみじく煩ひ出で、

遠江にかかる。小夜の中山など、越えけんほども

おぼえず。いみじく、くるしければ、天龍といふ、川

〔十一・オ〕

のつらに、仮屋つくりまうけたりければ、そこに

て、日ごろ、すぐるほどにぞ、やうくをこたる。冬深

くなりたれば、河風、烈しく吹き上げつ、⁴¹たへが

たくおぼえけり。そのわたりしつ、⁴²浜名の橋に

ついたり。浜名の橋、くだりし時は、黒木を渡した

渡りしは、一本には、渡せしともあるを、みれば、渡せりしとありしを、誤写せしにや。

りし、此度は、あとだに見えねば、舟にてわたる。入

江に渡りし橋なり。との海は、いといみじくあら

く、波高くて、入江のいたづらなるすどもに、こと

物もなく、松原の、茂れる中より、浪のよせかへる

も、いろくの、玉のやうに見え、まことに、松の末

〔十一・ウ〕

より、波は、こゆるやうに見えて、いみじくおもし

ろし。それよりかみは、井のはなといふ、さかの、え

もいは、⁴³ずわびしきを、のぼりぬれば、三河の国

の、高師の浜といふ⁴⁴。やつはしは、⁴⁵なのみして、橋の⁴⁶

39 語りぬ
40 ましも
41 て
42 「御」して

43 いはれ
44 山
45 は
46 やつ ナシ

かたもなく、なにの見所もなし。二村山の中に、と

まりたる夜、大きな柿の木の下に、庵をつくり

たれば、夜ひとよ、庵のうへに、かきの、落ちかゝり

たるを、人々ひろひなどす。宮ぢの山といふ所、こ

ゆるほど、十月晦日なるに、紅葉して、さかりなり。

嵐こそ、吹きこざりけれ、宮ぢ山、まどもみぢ

〔十二・オ〕

ばの、ちらでのこれる、三河と尾張となる、しかす

がのわたり、げに、おもひわづらひぬべく、おかし。

尾張の国なる、みの浦を過ぐるに、夕しほ、たゞ、み

ちにみちて、こよひ、宿からんも、ちうげんに、しほ

みちきなば、こゝをも過ぎじと、あるかぎり、走り

まどひすぎぬ。美濃の国なるさかひに、すのまた

あしがらなり
しの下には、を。
文字のあるべ
きを、省けり。

といわたりして、野がみといふ、所につきぬ。そ

こに、あそびどもいで来て、夜ひとよ、歌うたふに

あしがらなりし、思ひ出でられて、あはれに恋ひ

しき事、かぎりなし。雪降り、あれまどふに、ものゝ
〔十二・ウ〕

興もなく、不破の関、あつみの山など、こえて、近

江の国、おきなかといふ人の、家にやどりて、四五

日あり。みつさか⁴⁷山⁴⁷のふもとに、よるひる、しぐれ

あられ降りみだれて、日の光も、さやかならず。

いみじうものむつかし。そこをたちて、いぬがみ、

かむぎぎ、やすくりも⁴⁸となどいふ所々、なにとな

48 47
る 〔御〕の

くすぎぬ。湖のおもて、はるぐとして、なでしま、竹
生嶋などいふ、所々のみえたる、いとおもしろし。⁴⁹

せたのはし、みなくづれて、わたりわづらふ。栗津

にとゞまりて、しはすの二日、京にいる。くらくいき

〔十三・オ〕

つくべしと、申の時ばかりに、立ちてゆけば、関ちか

くなりて、山づらに、かりそめなる、きりかけとい

ふものしたる、かみより、丈六の仏の、いまだ、⁵⁰あら

づくりにおはするが、顔ばかり、みやられたり。あ

はれに人ばなれて、いづこともなくて、おはする

仏かなと、うち見やりてすぎぬ。こゝらの、国々を

過ぎぬるに、駿河の清見が関と、相坂の関とばか

りは、なかりけり。いと暗くなりて、三条の宮の、西

なる所に、つきぬ。ひろぐとあれたる所の、過ぎ

来つる、山々に⁵¹もおとらず、おほきに、おそろしげ

〔十三・ウ〕

なる、深山木どものやうにて、母なくなりにし、め

〔①〕〔⑧〕

ひどもも、うまれしよりひとつにて、よるは、左右

にふしおきするも、あはれに、おもひ出でられな

どして、心もそらに、ながめくらさる。たちぎ、か

いまむ人の、けはひして、いと、いみじく物つゝま

50 49
で (タ ナシ) の 「御」所の (タ ナシ)

52 51
し 来 ナシ
① 〔二十八・ウ3 「都のうちとも」に続く〕
⑧ 〔十七・ウ5 「覚ゆ」より続く〕

わびしかりつ
るの下には、に。
文字のあるべ
きを、省けり。

し。十日ばかりありて、まかでたれば、てゝはゝ、す

びつに、火などおこして、まぢみたりけり。車より⁵³

おりたるを、うち見て、おはする時こそ、ひとめも

見え、さぶらひなども、ありけれ。この日ごろは、人

ごゑもせず、まへに、人かげもみえず、いと心ほそ

〔十四・オ〕

く、わびしかりつる。かうてのみも、まろが身をば、

いかゞせむとかすると、うちなくを見るも、いとか

なし。つとめても、今日は、かくておはすれば、内外、

人おほく、こよなくにぎはゝしくも、なりたるか⁵⁴

など、うちいひて、むかひぬたるも、いとあはれに、

54 53
た
ナシ

なくなりにし
ぞとの下に、い
ふになどの文
字を、添へて聞
くべし。

なにのにほひの、あるにかと、涙ぐましようきこゆ。⁵⁵

ひじりなどすら、さきの世のこと、夢に見るは、い

とかたかなるを、いとかう、あとはかないやうに、

はかぐしからぬ心地に、夢に見るやう、清水の、ら

い堂にゐたれば、別当とおぼしき人、いで来て、

〔十四・ウ〕

そこは、さきの生に、この御寺の僧にて、なんあり

し。仏師にて、仏をいとおほく、作りたてまつりし、

功德によりて、ありしすぞうまさりて、人と生れた

るなり。この、みだうの東に、おはする丈六の仏は、

そこの、作りたりしなり。はくをおしきして、なく

55
ナシ

しては、して
ぎといはでは、
てにをは調ひ
がたし。傳写の
誤りにもや

なりにしぞと、あないみじ、さは、あれに、はくおし

奉つらむといへば、なくなりになしかば、こと人はく

おしたてまつりて、こと人、供養もしてしとみて

のち、清水にねむごろに参り仕うまつらまし

かば、さきの世に、そのみてらに、仏ねんじまう

〔十五・オ〕

しけんちからに、おのづから、ようも、をがましく

〔五〕

見えしかば、われは、かくて、とちこもりぬべきぞ

と、のこりなげに、世をおもひいふめるに、心ぼそ

56 さ堪へず。東は、野の、はるぐとあるに、ひんがしの

山ぎは、ひえの山よりして、稲荷などいふ山ま

〔十九・ウ5〕「あくればたち」に続く

56 〔二十八・ウ3〕「まじらひしは」より続く

で、あらはに見えわたり、西は、ならびの岡の松風、

いと耳ちかう、心ぼそく聞えて、内には、いたゞき

のもとまで、田といふもの、ひたひきならず、音

など、田舎のこゝちして、いとおかしきに、月のあか

き夜などは、いとおもしろきをながめ、あかしく

〔十五・ウ〕

らすに、しりたりし人、さと遠くなりて、おともせ

ず。便りにつけて、何事かあらむと、つたふる人に

おどろきて、

おもひいでて、人こそとはね、山ぎとの、まが

きのをぎに、秋風ぞふく、といひてやる。十月にな

りて、京にうつろふ。母、尼になりて、おなじ家の内

なれど、かたことに、すみはなれてあり。ては、たゞ

われをおとなにしすゑて、我は、世にもいでまじ
らはず、かげにかくれたらむやうにて、ゐたるを

見るも、たのもしげなく、心ぼそくおぼゆるに、き

〔十六・オ〕

こしめすゆかりあるところに、何となく、つれづれ
に心ぼそくて、あらんよりはとめすを、こだいの

おやは、宮づかへ人は、⁵⁷いとうきことなりと思ひ

て、すぐきするを、今の世の人は、さのみこそは、い

でたて。さても、おのづから、よぎためしもあり。さ

ても、こころみよといふ人々ありて、しぶくゝにい

だしたてらる。まづ、一夜まゐる。菊のこくうすぎ、

57 人 ナシ

八ばかりに、こき掻練を、うへに着たり。さこそ、物

がたりにのみ、心を入れて、それを見るより外に、

ゆきかよふるゐ、しぞくなどだに、ことになく、古

〔十六・ウ〕

代の親どもの、かげばかりにて、月をも、花をも、み
るより外の、事はなき慣ひに、立ちいづるほどの

心地、あれかにもあらず。⁵⁸現ともおぼえて、暁には

まかでぬ。さとびたる心地には、なかくゝ、⁵⁹定まりた

らむ、里ずみよりは、おかしきことをも、見聞きて、心

も、慰みやせむと、思ふをりくゝ、ありしを、いとは

したなく、悲しかるべき事にこそ、あべかめれと

59 58 見
また

思へど、いかがせむ。極月になりて、又、まゐる。局し

て、此度は、日頃さぶらふ。うへには、時々、よるくも

のぼりて、しらぬ人の中に、うち臥して、つゆまど

〔十七・オ〕

ろまれず。恥かしう、物のつゝましきまゝに、忍びて

うち泣かれつゝ、暁には、夜ふくおりて、ひくら

して、⁶¹この老い衰へて、われを子としも、頼もし

⁶²

からむ、かげのやうに、思ひ頼み、向ひゐたるに、

恋しく、おぼつかなくのみ覚ゆ。^⑦^⑫くちほし、いかに、

よしなかりける心なりと、思ひしみはてゝ、まめ

60 に ナシ

61 「御」ゝ

62 と

⑦ 〔十四・オ1 「母なくなりにし」に続く〕

⑫ 〔二十一・オ5 「あな、物ぐ」より続く〕

くしく、過すとならば、さても、有り果てず。まゐ

りそめし所にも、かく、かき籠りぬるを、まことと

も、おぼしめしたらぬさまに、人々もつげ、絶えず、

めしなどする中にも、わざとめして、わかい人、参

〔十七・ウ〕

らせよと、仰せらるれば、えさらず、出だしたつる

にひかされて、又、時々いでだてど、過ぎにし方の

やうなる、あいなのだのみの、心をごりをだに、すべ

きやうもなくて、さすがに、若い人にひかれて、を

りく、さし出づるにも、馴れたる人は、こよなく、何

事につけても、ありつきがほに、我は、いと、わかう

どに有るべきにもあらず。又、おとなにせらるべ

き、おぼえもなく、時々のまらうとに、さしはなた⁶³

れて、すぐろなるやうなれど、ひとへに、そなた一

つを、頼むべきならねば、我より増る、人あるも、羨

〔十八・オ〕

ましくもあらず。なか／＼心易くおぼえて、さるべ

き折節、まゐりて、つれ／＼慰むべき人と、物語りな

どして、愛たきことども、おかしく、おもしろき折

々も、我身は、かやうにたち交り、いたく人にも、み

しられむにも、憚りあんべければ、たゞ大方の事

にのみ、聞きつゝ過ぐすに、内の御供に参りたる

をり、有明の月、いとあかきに、わがねんじ申す、天

照御神は、内にぞ、在しますなるかし。かゝるをり

に参りて、をがみ奉らんと思ひて、四月ばかりの、

月の明かきに、いと忍びて参りたれば、はかせの

〔十八・ウ〕

命婦は、しる便りあれば、とうろの火の、いとほの

かなるに、あさましく、おい神さびて、さすがに、い

とよう、物などいひあたるが、人とおぼえず。神

のあらはれ給へるかど、おぼゆ。又の夜も、月のい

とあかきに、藤壺の、ひんがしの戸を、おしあけて、

さべき人々、物がたりしつゝ、月をながむるに、梅

壺の女御、のぼらせ給ふなる、おとなひ、いみじう

心にくゝ優なるにも、故宮の、在します世ならまし

かば、かやうにのぼらせ給はましなど、人々、いひ出

64 63
た ナシ
〔御〕なるさんへき人

づる、げに、いとあはれなりかし。

〔十九・オ〕

天の戸を、雲居ながらも、よそに見て、むかし

の跡を、こふる月かな、冬になりて、月なく雪も降

らずながら、星の光に、空、さすがに、くまなく、さ

えわたりたる夜のかぎり、殿の御かたに、さぶらふ

人々と、物語りし、明かしつゝ、あくれば、たちやあ

〔十〇〕

らまし。いと、いふかひなく、まうでつかうまつる

こともなくて、やみにぎ。十二月廿五日、宮の御仏名

に、めしあれば、其夜ばかりと、思ひて、参りぬ。白き

きぬどもに、濃きかいねりを、みな着て、四十餘人

たちやあらま
しは、誤脱もや
あるらん。数本、
みな、斯くのこ
とくなれども、
意さだかなら
ず。

ばかり、出でるたり。しるべしいでし人の、かげに隠

〔十九・ウ〕

れて、あるが中に、うちほのめいて、暁には、まか

づ。雪うち散りて、いみじく烈しく、さえ氷る、暁方

の月の、ほのかに、こき掻練の袖に、移れるも、げに

濡るゝかほなり。道すがら、

年はくれ、夜は明け方の、月かげの、袖にうつ

れる、程ぞはかなき、かう立ち出でぬとならば、さ

ても宮づかへのかたにも、たち馴れ、世にまぎれ

たるも、ねちけがましきおぼえも、なきほどは、お

のづから、人のやうにも、おぼし、もてなさせ給ふ

やうも、あらまし。親たちも、いと心得ず。ほどもな

〔二十・オ〕

く、こめすゑつ。さりとて、その有様の、忽ちに、きら

⑬ 【四十三・オ5】「わかれ」に続く

⑩ 【十五・ウ1】「ようも」より続く

65 も ナシ

くしき勢ひなど、あんべいやうもなく、いとよし

なかりけり。すゞろ心にてても、ことの外に、違ひぬる

有様なりかし。⁶⁶

いく千度、水の田芹をつみしかど、思ひしこ

との、つゆもかなはぬ、とばかり、ひとりごたれて、

やみぬ。その後は、何となく、まぎらはしきに、物語の

ことも、打ちたえ、忘られて、物まめやかなるさま

に、心もなり果てゝぞ、などで、多くの年月を、いた

づらにて、臥し起きしに、行ひをも、物まうでをも、
〔二十一・ウ〕

せざりけむ。このあらましごととても、思ひしこと

なり果てゝぞの、ぞ文字、おちつかず。ひとつの動詞、おちたるなるべし。

どもは、この世にあんべかりけることどもなりや。

光源氏ばかりの人は、此世に、おはしけりやは。

薫る大将の、宇治にかくしすゑ、給ふべきも、なき

世なり。あな、物ぐるほしや。^⑩〔4〕⁶⁷ 68 国にて、物語でを、わづ

かにしても、はかぐしく、人のやうならむとも、ね

んぜられず。此頃の、世の人は、十七八よりこそ、経

よみ、行ひもすれ。さること、思ひかけられず。から

うじて、思ひよることは、いみじく、やんごとなき⁶⁹

かたち、有様、物語にある、光る源氏などやうに、在
〔二十一・オ〕

⑩ 〔十七・ウ5〕「覚ゆ」に続く

④ 〔四十三・オ5〕「思ひつゞく」より続く

67 〔御〕を役にて

68 し ナシ

69 〔御〕く

せん人を、年に一度にても、通はし奉りて、浮舟の

女君のやうに、山里に、かくしすゑられて、花、紅葉、

月、雪をながめて、いと心ぼそげにて、めでたから

ん、御文などを、時々、待ち見などこそせめと、ばか

り思ひつゞけ、あらましごとにも、おぼえけり。親と

なりなば、いみじうやむごとなく、我身もなりな

んなど、たゞ、行くへなきことを、うち思ひ過すに、

親、からうじて、はるかに、遠きあづまになりて、年

頃は、いつしか思ふやうに、近き所に、なりたらば、

まづ、胸あくばかり、かしづき立て、ゐてくだりて、

〔二十一・ウ〕

海山のけしきもみせ、それをばさるものにて、我

が身よりも、高うもてなしかしづきて、見んとこ

そ思ひつれ。我も人も、宿世の、拙なかりければ、あ

りくゝて、かく、遙かなる国に、なりにたり。幼なかり

し時、東の国に、ゐてくだりてだに、心地も、いさゝか

あしければ、是をや、此国に見捨て、まどはんと

すらんと思ふ。人の国の、おそろしきにつけても、

我が身、一つならば、安らかならましを、所せう、ひ

き俱して、いはまほしき事も、えいはず、せまほし

き事も、えせずなどあるが、わびしうもあるかなと、

〔二十二・オ〕

心をくだきしに、今は、まいて、おとなになりした

るを、⁷⁰将てくだりて、わが命も知らず、京の中にて、

70 ゐ 「御」 ゐ

さすらへむは、例の事、東の国、田舎⁷¹、人に成りて、ま

どはむは、いみじかるべし。京とても、たのもしう

迎へとりてんと思ふ、類、親族もなし。さりとて、わ

づかに、なりたる国を、辞し申すべきにもあらねば、

京にとめて、長き別れにて、やみぬべきなり。京

にも、さるべきさまにもてなして、止めんとは、思

ひよることにもあらずと、よるひるなげかるゝ

を、聞く心地、花、紅葉の思ひも、みな忘れて、悲しく、

〔二十二・ウ〕

いみじく思ひ嘆かるれど、いかがはせん。七月十

三日に下だる。五日、かねては、見んも、中々成るべ

ければ、うちにも参らず^{72 73}。まいて其日は、立ち騒ぎ

て、時成りぬれば、今はとて、すだれを引きあけて、

うち見合せて、涙を、ほろくとおとして、やがて

出でぬるを、見送る心ち、目もくれまどひて、やが

てふされぬるに、とまる男の⁷⁴、送りして帰るに、ふ

ところ紙に、

思ふこと、心にかなふ、身なりせば、秋の別れ

を深くしらまし、とばかりかゝれたるを、え見や

〔二十三・オ〕

られず。ことよろしき、時こそ、こしをれがゝりた

71
に

74 73 72
を こ 〔御〕
い

る事も、思ひつゞけ⁷⁵れ。ともかくも、いふべきかたも、おぼえぬまゝに、

かけてこそ、思はざりしか、此世にて、しばし

も君に、別るべしとは、とやか⁷⁶れにけん。いとゞ人

目も、見えず、淋しく心ぼそく、うちながめつゝ、い

づこばかりと、明暮思ひやる。道の程も、しりにし

かば、はるかに恋ひしく、心細き事、限りなし。明

るより、暮るゝまで、東の山際をながめて、すこ

す。八月ばかりに、うづまきに籠るに、一条より詣

「(二十三・ウ)

づる道に、男車、二つばかり、ひきたてゝ、物へ行くに、

諸共に、来べき人、待つなるべし。過ぎて行くに、従身だつものを、おこせて、

花みに行くと、君をみるかな、といはせられたば、

かゝるほどの事は、いらへぬも、便なしなど、あれ

ば、

ちぐさなる、心ならひに、秋の野の、とばかり

いはせて、いき過ぎぬ。七日、待ふ⁷⁶ほども、たゞ東路

のみ、思ひやられて、よしなし。⁷⁷とかくして、はなれ

て平らかに、あひ見せ給へと申すは、仏もあはれ

「(二十四・オ)

と、聞きいれさせ給ひけんかし。冬になりて、日暮

75 けれども。かくも

77 76 候 「御」さふら
「御」ことからうして

らし、雨ふりくらいたる夜、雲かへる風烈しう打

ち吹きて、空晴れて、月いみじう、あかう成りて、軒

近き荻の、いみじう風にふかれて、くだけまどふ

が、いとあはれにて、

秋をいかに思ひいづらん、冬ふかみ、嵐にまど

ふ、荻のかれ葉は、東より、人来たる。神拝といふわ

ぎして、国の中、ありきしに、水おかしく流れたる

野の、はるぐとあるに、森⁷⁸のある、おかしき所かな、

みせてと、先づ思ひいで、こゝは、いづことかいふ

〔二四・ウ〕

と問へば、こしのびの森となん、申すと答へたり

森云々より、問
へばの間に、詞
おちたるべし。
意たしかに、き
こえがたし。

しが、身によそへられて、いみじく悲しかりしか

ば、馬よりおりて、そこにふた時なん、ながめられ

し。

とゞめおきて、我がごと物や、思ひけん、みるに

悲しき、こしのびの森、となむおぼえしと、あるを

みる心地、いへば更なり。返りごとに、

こしのびを、聞くにつけても、留めおきし、

ちゝぶの山の、つらき東路、かうて、つれぐとながむ

るに、などか、物まうでも、せざりけん。母、いみじか

〔二五・オ〕

りし、古代の人にて、初瀬には、あなおそろし、奈良

坂にて、人にとられなば、いかがせむ、石山、関山こえ

て、いとおそろし。鞍馬は、さる山、ゐて出でん、いと

まことしかべいは、まことしかるべきを、或ひは約め、或ひは音便にして、いひなしたるなり。

おそろしや。親登りて、ともかくもと、さしはなち

たる、人のやうに、わづらはしがりて、わづかに、清

水に、ゐて籠りたり。それにも、例のくせは、まこと

しかべいことも、思ひ申されず。彼岸のほどにて、

いみじう、騒がしうおそろしきまで、おぼえて、

うちまどろみ入りたるに、御帳の方の、いぬふせ

ぎのうちに青き織物の衣を着て、錦を頭にも
〔二十五・ウ〕

かづき、足にもはいたる、そのの、別当とおぼしき

が、より来て、ゆくさきの、あはれならむも知らず。

さも、よしなし事をのみと、うちむつかりて、御帳

の内に、入りぬとみても、打驚きても、かくなん見え

つるとも、語らず。心にも、思ひとゞめで、まかでぬ。母、

申すべきの下は、ぞ。文字を省きたるなり。べきにて、切れたるには、あらず。

一尺の、鏡をいさせて、えゐて参らせぬ、かはりに

とて、そうをいだしたてゝ、初瀬に詣でさすめり。

三日、侍ひて、此人の、あべからむさま、夢に見せ給

へなど、いひて、まうでさするなめり。其程は、精進

せさす。この憎、帰りて、夢をだに見て、まかでなん
〔二十六・オ〕

が、本意なきこと、いかゞ帰りても、申すべきと、い

みじう、ぬかづき行ひて、寝たりしかば、御帳のか

たより、いみじうけだかう、清げに在する女の、麗

はしうさうぞき給へるが、奉りし鏡をひきさげ
79

て、此鏡には、文やそへたりしと、問ひ給へば、かしこ
80

80 79
〔御〕く
〔御〕ひ

まりて、文もさぶらはざりき。此鏡をなん、奉れと

侍りしと、答へ奉れば、あやしかりける事かな。文

そふべきものをとて、此鏡を、こなたに移れる影

を見よ。これ見れば、あはれに悲しきぞとて、さめ

ぐと泣き給ふを、見れば、ふしまろび泣きなげ

〔二十六・ウ〕

きたる影、移れり。此影をみれば、いみじう悲しな

これ見よとて、いまかたつ方に、移れる影を、みせ

給へば、御簾ども、青やかに、木帳おし出でたる、下

より、いろ／＼の、きぬこぼれいで、梅桜、咲きたる

に、鶯、こづたひ鳴きたるを、みせて、これを、見るは、

嬉しなど、宣ふと、なむ、みえしとかたるなり。いか

神仏にかはな
どの、かは、反
辞にはあらず。
神仏にかあら
んさるはなど
いふべきを、斯
くは、略せしな
るべし。此たぐ
ひ、此ころの書と
もに、多し。

に見えけるぞとだに耳もとどめず。物はかなき⁸¹

心にも、つねに、天照る御神を、念じ申せといふ、人

あり。いづくに在します、神仏にかはなど、さはい

へど、やう／＼思ひわかれて、人に問へば、神に在しま

〔二十七・オ〕

す。伊勢に在します。紀伊国に、きのこくさうと申

すは、此御神なり。さては、内侍所に、すべら神とな

ん、在しますといふ。伊勢の国までは、思ひかくべ

きにも、あらざなり。内侍所にも、いかでかは、参り

をがみたて奉らん。空の光を、ねむじ申すべきにこそ

はなど、うきておぼゆ。しぞくなる人、尻に成りて、

すがく院に入りぬるに、冬頃、

なみださへ、ふりはへつゝぞ、おもひやる、あ

らし吹くらん、ふゆのやまざと。

かへし

〔二十七・ウ〕

わけて、とふ、心のほどの、見ゆるかな、木かげ

をぐらき、夏のしげりを、あづまに下りし、親か

らうじて、登りて、西山なる所に、おちつきたれば、

そこに、みな渡りて、見るに、いみじう嬉しきに、月

のあかき夜、ひと夜、物がたりなどして、

かゝる世も、有りけるものを、かぎりとして、君に

別れし、秋はいかにぞ、といひたれば、いみじくな

きて、

思ふこと、かなはずなぞと、いとひこし、命の

ほども、今ぞ嬉しき。これぞ、別れのかどでと、いひ

〔二十八・オ〕

知らせしほどの、悲しさよりは、平らかに、待ちつ

けたる、嬉しさも、かぎりなけれど、人のうへにて

も見しに、老い衰へて、世に、いでまじらひしは、都

〔五〕〔二〕

のうちとも見えぬ、所のさまなり。ありもつかず、

いみじう物騒がしけれども、いつしかと、思ひし

事なれば、物話もとめて、見せよ、くくと、母をせむ

れば、三条の宮に、親族なる人の、衛門の命婦

とて、侍らひける、尋ねて、文やりたれば、珍らしが

侍らひけるの
下には、を文字
のあるべきを、
省けり。おろ
したるの下
には、ぞ。文字

⑤ 〔十五・ウ〕「ようも」に続く

② 〔十四・オ〕「やうにて」より続く

を省けるなり。
たるより、直ち
にとてに、かけ
たるにはあら
ず。

りて、悦びて、御前のを、おろしたるとて、わざと、愛

たきさうしども、硯の箱のふたにいでて、おこせ

〔二十八・ウ〕

たり。嬉しくいみじくて、夜昼、これを見るより、う

ちはじめ、またくも、見まほしきに、ありもつかぬ、

都のほとりに、誰かは、物がたりもとめ、見する人

のあらん。継母なりし人は、みやづかへせしが、下

りしなれば、思ひしにあらぬ、ことどもなど、あり

て、世の中恨めしげにて、外に渡るとて、五つばか

りなる、ちごどもなどして、あはれなりつる、心の

ほどなん、忘れん世あるまじきなど、いひて、梅の

木の、つま近くて、いとおほきなるを、これが、花の

咲かん折は、来んよといひおきて、渡りぬるを、心

〔二十九・オ〕

の内に、恋しく、あはれなりと思ひつゝ、忍びねを

のみ泣きて、其年も帰りぬ。いつしか、梅咲かな

ん。来むと有りしを、さやあると、目をかけて、待ち

渡るに、花も、みな咲きぬれど、音もせず。思ひわ

びて、花ををりてやる。

たのめしを、猶や待つべき、霜枯れし、梅を

も春は、忘れざりけり、といひやりたれば、あはれ

なる事どもかきて、

なほたのめ、梅の立枝は、契りおかぬ、思ひの

外の、人もとふなり。其春、世の中、いみじう騒がし

〔二十九・ウ〕

82
うて、まつぎとのわたりの月影、あはれに見し、め

のとも、三月朔日になくなりぬ。せんかたなく、思

ひなげくに、物がたりのゆかしさも、おぼえずな

りぬ。いみじく泣き暮らして、見いだしたれば、

夕日の、いとはなやかに、さしたるに、桜の花、残り

なく散りみだる。

散る花も、又こん春は、みもやせん、やがて別

れし、人ぞ恋しき。また聞けば、侍従の大納言の

御むすめ、なくなり給ひぬなり。殿の中将の、おほ

しなげくなるさま、我が物の悲しき、をりなれば、

「三十・オ」

82
う ナシ

いみじくあはれなりと聞く。のぼりつきたりし

時、これ、手本にせよとて、此姫君の、御てをとらせ

たりしを、小夜ふけて、ねぎめざりせば、などかき

て、鳥辺山、谷にけぶりの、もえたらば、⁸³はかなく見

えし、我としらなむと、いひしらず、おかしげに、め

でたく書き給へるを、見て、いと涙をそへ増る。

かくのみ、思ひくんじたるを、心も慰めんと、心ぐ

るしがりて、母、物語など求めて、見せ給ふに、げに、

おのづから慰み行く。紫のゆかりを見て、つゞき

の見まほしく、おぼゆれど、人かたらひなども、え

「三十・ウ」

83
「御」

せず。されど、いまだ、都馴れぬほどにて、え見つけ

ず。いみじく心もとなく、ゆかしくおぼゆるまゝ

に、この源氏の物語、一の巻よりして、みな見せ給へ⁸⁴

と、心の中に祈る。親の、うづまさに籠も給へるに

も、異事なく、此事を申して、いでんままに、此物語

見はてむと思へど、見えず。いと口惜しく、思ひなげ

かるゝに、叔母なる人の、田舎より、のぼりたる所に、

渡いたれば、いと、うつくしうおひなりにけりな

ど、あはれがり珍らしがりて、帰るに、何をか奉ら

ん、まめくしき物は、まだなかりなん。⁸⁵ ゆかしく

〔三十一・オ〕

し給ふなるものを、奉らんとて、源氏の五十余巻、

櫃に入りながら、ぎい中将、とほぎみ、せり川、しらゝ、

あさうづなどいふ物語ども、一袋、とり入れて、え

て帰る心地の、嬉しさぞ、いみじきや。はしなく、わ

づかに見つゝ、心もえず、心もとなく思ふ、源氏を、

一の巻よりして、人もまじらず、木丁のうちに、打

ちふして、ひきいでつゝ見る心地、後の位も、何にかは

はせむ。昼は、日ぐらし、よるは、目のさめたるかぎ

り、火を近くともして、是を、見るより外の事、なけ

れば、おのづから、名などは、⁸⁶ ⁸⁷そらに覚え浮かぶを、い

〔三十一・ウ〕

85 84
の ナシ
〔御〕の物かたり

87 86
名 ナシ
〔御〕

みじき事に思ふに、夢に、いと清げなる僧の、黄な

る地の袈裟、着たるが来て、法花経五巻を、とく習

へといふと、見れど、人にも語らず。習はむとも、思

ひかけず。物がたりの事をのみ、心にしめて、我は

此頃わろきぞかし。盛りにならば、かたちも、か

ぎりなくよく、髪も、いみじく長くなりなん。ひか

る源氏の、夕顔、宇治の大将の、うき舟の、女君の

やうにこそ、あらめと、思ひける心、まづいとはか

なくあさまし。五月ついたち頃、つま近き花橘の、

いと白く散りたるをながめて、

〔三十二・オ〕

時ならず、ふる雪かとぞ、ながめまし、花橘の、

かをらざりせば。足柄といひし、山の麓に、くらが

有りつるとは、

有りつなどと

ありしを、誤写

せしなるべし。

つるより、とに

かゝらざるは、

いふも更なれど

も、たとへ、か

くとしても、詞

たらぬこゝち

せらる。

り渡りたりし、木のやうに、茂れる所なれば、十月

ばかりの紅葉、四方の山辺よりも、げに、いみじく

おもしろく、錦をひけるやうなるに、外より、来た

る人の、今、参りつる道に、紅葉の、いとおもしろき

所の、有りつるといふに、ふと、

いづこにも、おとらじものを、我が宿の、よ

をあきはつる、けしきばかりは、物語りの事を、ひ

るは、日暮らし、思ひつゞけ、よるも、目のさめたる

〔三十二・ウ〕

かぎりは、是をのみ、心にかけてるに、夢に見ゆる

やう、此ごろ、皇太后宮の、一品の宮の御れうに、六

角堂に、やり水をなんつくと、いふ人あるを、そ

は、いかにと問へば、天照る御神を、ねんじませと、

いふと見て、人にも語らず。何とも思はで、やみぬ

る、いといふかひなし。春毎に、此一品の宮を、ながめやりつゝ、

咲くとまち、散りぬとなげく、春はたゞ、我が

宿がほに、花を見るかな。三月つごもりがた、つち

いみに、人のもとに、渡りたるに、桜の盛りに、おも

〔三十三・オ〕

しらく、今まで、散らぬも、あり。かへりて、又の日、

あかざりし、やどの桜を、春かれて、散りがた

にしも、ひとり見みしかな、といひにやる。花の咲き

散るをりごとに、乳母、なく成りし、折ぞかしとの

み、あはれなるに、同じをり、なく成り給ひし、侍従

大納言の、御むすめの、書を見つゝ、すゞろに、あは

れなるに、五月ばかり、夜ふくるまで、物がたりを

よみて、起き居たれば、来つらん方も、見えぬに、

猫の、いと長うないたるを、驚きて見れば、いみじ

うをかしげなる、猫あり。いづくより、来つる猫ぞ

〔三十三・ウ〕

と、見るに、姉なる人、⁸⁸あながま。人に聞かすな。いと

おかしげなる、猫なり。かはむとあるに、いみじう、

人馴れつゝ、かたはらにうちふしたり。尋ぬる人

やはと、是をかくしてかふに、すべて、下司のあたり

にも、よらず。つと、前にのみありて、ものも、きたな

げなるは、外ざまに、顔をむけて、くはず。姉おとゝ

88 あなかま 「御」あなかま

の中に、つと、まとはれて、おかしがり、らうたがる
ほどに、姉の、なやむ事あるに、物騒がしくて、此猫
を、北おもてにのみ、あらせて、呼ばねば、かしがま
しく、なきのゝしれども、なほさるにてこそはと、
〔三十四・オ〕
思ひて、あるに、わづらふ姉、驚きていづら、猫は、こ
ち、ゐてことあるを、など、問へば、夢に、此猫の、側
らに来て、おのれは、侍従の大納言殿の、御むすめ
の、かくなりたるなり。さるべきえんの、いさゝか
有りて、この中の君の、すゞろにあはれと、思ひ出
で給へば、たゞしほし、こゝに有るを、此頃、下司の
中にありて、いみじうわびしき事と、いひて、いみ
じう泣くさまは、あてに、おかしげなる人と、見え

て、打ち驚きたれば、此猫の声にて、有りつるが、い

みじくあはれなるなりと、かたり給ふを聞くに、

〔三十四・ウ〕

いみじくあはれなり。其後は、此猫を、北面にも出

ださず。思ひかしづく、たゞひとり居たる所に、此

猫が、向ひ居たれば、かひなでつゝ、侍従大納言の、

姫君の、座するな。大納言殿にしらせ奉らばやと、

いひかくれば、顔をうちまもりつゝ、⁸⁹なごうなく⁹⁰

も、心の思ひなし、目のうちつけに、例の猫には、あ

らず、聞きしりがほに、あはれなり。⁹¹世の中に、長恨

歌といふ文を、物がたりにかきてある所、あんな

89 語れば
90 なかよ
91 や(り ナシ)

りと聞くに、いみじくゆかしけれど、えいひよら

ぬに、さるべき便りを尋ねて、七月七日、いひやる。

〔三十五・オ〕

ちぎりけん、むかしの、今日の、ゆかしさに、あ、

まのかはなみ、打ち出つるかな

返し、

立ちいづる、天の河辺の、ゆかしさに、常は

ゆゝしき、ことも忘れぬ。その、十三日の夜の月、い

みじく、くまなくあかきに、皆人も、寝たる、夜中ば

かりに、縁に出であて、姉なる人、空をつくぐとな

がめて、只今、ゆくへなく、飛びうせなば、いかゞ思

ふべきと、問ふに、なまおそろしと、思へるけしき

思ふべきの下
には、ぞ文字の
あるべきを、省
けり。

を見て、異事にいひなして、笑ひなどして、きけば、

〔三十五・ウ〕

かたはらなる所に、さきおふ車、とまりて、荻の葉

くと、呼ばすれど、答へざなり。呼びわづらひて、笛

を、いとおかしく吹きすまして、すぎぬなり。

笛の音の、たゞ秋風と、きこゆるに、など荻の

葉の、そよとこたへぬ、といひたれば、げにとて、

荻の葉の、こたふるまでも、吹き寄らで、たゞ

に過ぎぬる、笛の音ぞうき。かやうに、あくるまで、

ながめあひて、夜明けてぞ、みな人、寝ぬる。そのか

へる年、四月の夜中ばかりに、火の事ありて、大納

言殿の姫君と、思ひかしづきし、猫も焼けぬ。大納

〔三十六・オ〕

言殿の姫君と、呼びしかば、聞きしりがほになき

て、あゆみ来などせしかば、てゝなりし人も、めづ

らかに、あはれなることなり。大納言に、申さむな

ど、ありし程に、いみじう、あはれに口惜しくおほ

ゆ。ひろくと、物深き、深山のやうには、ありなが

ら、花、紅葉のをりは、四方の山辺も、何ならぬを、見

ならひたるに、たどしくなく、⁹²せばき所の庭の、ほ

どもなく、木などもなきに、いと心うきに、向ひな

る所に、梅⁹³こうばいなど、咲きみだれて、風につけ

て、かをりくるに、つけても、往み馴れし故郷、かぎり
〔三十六・ウ〕

なく思ひ出でらる。

93 92
のへ
〔御〕へ

風を身にしめては、風の身にしめての、誤り
しみてといへば、下句の窓のしきを、他動の語にかへでは、自他の語脈とゝのひがたし。
此日記、誤脱多ければ、うち思はるゝまゝをなん。

匂ひくる隣の風を身にしめてありし軒端

の、梅ぞ恋しき、其五月の朔日に、姉なる人、子、産

みて、なくなりぬ。よその事だに、幼くより、いみし

くあはれと、思ひ渡るに、まして、いはん方なく、あ

はれ悲しと、思ひなげかる。母などは、みななく、⁹⁴成

りたる方に、あるに、かたみにとまりたる、幼き人々

を、左右にふせたるに、荒れたる、板屋のひまより、

月のもり来て、ちごの顔にあたりたるが、いとゆゝ

しくおぼゆれば、袖⁹⁵うちおほひて、今ひとりをも、
〔三十七・オ〕

かきよせて、思ふぞいみじきや。其程過ぎて、しぞ

95 94
を
〔御〕を

かへりごとは、
かへしとある
べき事、上にい
へるが如し。

くなる人のもとより、昔の人の、必ず求めて、おこ

せよと、有りしかば、もとめしに、其をりは、え見出

でず成りにしを、今しも、人の、おこせたるが、あは

れに悲しき事とて、かばね尋ぬる宮といふ、物

語を、おこせたり。まことにぞ、あはれなるや。返り

事に、

埋もれぬ、かばねを何に、尋ねけん、苔の下に

は、身こそ成りぬれ、乳母なりし人、今は、何につけ

てかなど、なくく、もと、ありける所に、帰り渡るに、
〔三十七・ウ〕

故郷に、かくこそ人は、帰りけれ、あはれいな

なる、別れなりけん、昔のかたみには、いかでとな

ん思ふ、などかきて、硯の水のこほれば、みなとち

かへりごとは、
上にいへるが
如し。

られて、とゞめつと、いひたるに、

かき流す、跡はつらゝに、閉ぢてけり、何を忘

れぬ、かたみとか見ん、といひやりたる、返り事に、

なぐさむる、かたも渚の、浜千鳥、何かうき世

に、跡もとゞめむ。此乳母、墓所見て、なくくかへり

たりし。

登りけむ、野辺は烟も、なかりけり、いづこを
〔三十八・オ〕

はかと、尋ねてか見し。是を聞きて、継母なりし人、

そこはかと、知りて行かねど、先に立つ、涙ぞ

道の、しるべなりける、かばね尋ぬる宮、おこせた

りし人、

往み馴れぬ、野辺の笹原、あとはかも、なくく

いかに、尋ねわびけん、是を見て、せうとは、その夜、
おくりにいきたりしかば、⁹⁶

見しまゝに、燃えし烟は、つきにしを、いかゞ

尋ねし、野べの笹はら、雪の、日を経て降る頃、吉野

山に住む尼君を、思ひやる。

〔三十八・ウ〕

雪ふりて、まれの人目も、絶えぬらん、吉野の

山の、峯のかけ道、かへる年、正月のつかさめしに、

親のよろこびすべき事ありしに、かひなき、つと

めて、同じ心に、思ふべき人の、許より、さりととも、

思ひつゝ、あくるを待ちゐる、心もとなさなど、いひ

かへりごとは、
上にいへるが
如し。

て、

明くるまつ、鐘の声にも、夢さめて、秋の百夜

の、心地せしかな、といひたる、返り事に、

あかつきを、何にまちけん、思ふ事、なるとも

〔三十九・オ〕

きかぬ、かねの音ゆゑ、四月つごもり、がた、さるべ

きゆゑありて、東山なる所へ移つろふ。道のほど、田

の、苗代水、まかせたるも、植たるも、何となく青み、

おかしく見え渡りたる山の、かげくろう、まへ近く

見えて、心ほそくぞあはれなる。⁹⁷ 夕暮、水鶏いみじ

く鳴く、

96 い ナシ

97 ぞ ナシ 「御」ぞ ナシ

たゞくとも、誰れか水鶏の、くれぬるに、山路

をふかく、尋ねては来ん、霊山近き所なれば、まう

でゝをがみ奉るに、いとくるしければ、山寺なる

石井によりて、手に結びつゝ、のみて、此水の、あかす

おぼゆる⁹⁸など、いふ人のあるに、

〔三十九・ウ〕

奥山の、石間の水を、結びあげて、あかぬもの

とは、今のみやしる、といひたれば、水のむ人、

山の井の、雫に濁る、水よりも、こはなほあか

ぬ、こゝちこそすれ、帰りて、夕日けざやかにさし

たるに、都のかたも、残りなくみやらるゝに、此雫

に濁る人は、京に帰るとて、心ぐるしげに思ひて、

またつとめて、

山の端に、入日の影は、いりはてゝ、心ぼそく

ぞ、ながめやらまし、念仏する僧の、暁にぬかづく

音の、尊く聞こゆれば、戸をおしあけたれば、ほの

〔四十・オ〕

ぐくと明けゆく、山ぎはこぐらき、梢ども、霧り渡りて、

花、紅葉の盛りよりも、何となく茂りわたれば、空

のけしき、⁹⁹くもらはしくおかしきに、郭公さへ、い

と近き梢に、あまた度ないたり。

誰にみせ、誰れにきかせん、山里の、此暁も、を

ちかへる音も、此つごもりの日、谷のかたなる木の
上に、郭公、かしがましくないたり。

都には、待つらんものを、子規、けふひねもす
に、なきくらすかな、などのみ、ながめつゝ、もろと

もにある人、只今、京にも、聞きたらん人、あらんや。

〔四十・ウ〕

かくてながむらんと、思ひおこする人、あらんや、
などいひて、

山ふかく、たれか思ひは、おこすべき、月みる

人は多からめども、といへば、

深き夜に、月見のをりは、しらねども、まづ山

里ぞ、思ひやらるゝ、暁になりやしぬらんと、思ふ

ほどに、山の方より、人あまたくる音す。驚きて、み

やりたれば、鹿の、えんのもとまで来て、うちない

たる、近うてはなつかしからぬ、ものゝ声なり。

秋の夜の妻こひかぬる、鹿のねは、遠山にこそ、
きくべかりけれ、しりたる人の、近きほどに、来て

〔四十一・オ〕

帰りぬと、聞くに、

まだ人目、しらぬ山べの、松風も、音してかへ

る、物とこそきけ、八月になりて、廿余日の暁方の

月、いみじくあはれに、山の方は、こぐらく、瀧の音

ども、似る物なく¹⁰¹のみ、ながめられて、

思ひしる、人に見せばや、山里の、秋の夜深き、

101 100
て 落
〔御〕をと

有明の月、京に帰り出づるに、わたりし時は、水ばかり見えし、田ども、みな、刈りはてけり。

苗代の、水かげばかり、みえし田の、かりはつ
〔(四十一・ウ)〕

るまで、なが居しにけり、十月つごもりがたに、あからさまに来て、見れば、こぐらうしれりし、木の

葉ども、残りなく散りみだれて、いみじくあはれげに、見え渡りて、心地よげに、さゝらぎ流れし

水も、木の葉に埋もれて、跡ばかりみゆ。

水さへに、すみたえにけり、木葉ちる、嵐の山の、こゝろぼそさに、¹⁰²そこなる厄に、春まで命あら

ば、必ず来む。花盛りは、まちつげよ、などいひて、帰りにしを、年帰りて、三月十余日になるまで、音も

せねば、
〔(四十二・オ)〕

契りおきし、花のさかりを、つげぬかな、春やまだ来ぬ、花や匂はぬ、旅なる所に来て、月の頃、竹

のもと近くて、風の音に、目のみさめて、うちとけて、ねられぬ頃、

竹の葉の、そよぐ夜毎に、ねざめて、何とも

なきに、物ぞ悲しき、秋の頃、そこを立ちて、外へ移ろひて、そのあるじに、

いづことも、露のあはれは、わかれじを、浅茅が原の、秋ぞこひしき、継母なりし人、くだりし国

の名を、宮にもいはるるに、こと人通はして、後も
〔(四十二・ウ)〕

なほ、其名をいはるときゝきて、おやの今は、あいな
きよし、いひにやらんと、有るに、

あさくらや、今は雲居に、聞く物を、なほき

のまろが、名のりをばする、¹⁰³かやうに、そこはかと

なき事を、思ひつゞく、^③^⑭わかれくしつゝ、まかでし

を、思ひ出でければ、

月もなく、花もみざりし、冬の夜の、心にしみ

て、こひしきやなぞ、われもさ思ふ事なるを、同じ

心なるも、おかしうて、

103 「御」や

③ 「二十一・オ」るほしや。国へて」に続く」

⑭ 「十九・ウ5」たち」より続く」

さえし夜の、氷は袖にまたとけて、冬の夜な
〔(四十三・オ)〕¹⁰⁴

がら、音をこそはなけ、御前にふしてきけば、池の

鳥どもの、よもすがら、声々はぶき騒く、音のする

に、目もさめて、

わがごとぞ、水のうきねに、あかしつゝ、上毛

の霜を、はらひわぶなる、とひとりごちたるを、か

たはらにふし給へる人、聞きつけて、

まして思へ、水のかりねの、ほどだにぞ、うはげ

の霜を、払ひわびける、かたらふ人どち、局のへだ

てなる、やり戸をあけあはせて、物語などしくら

104 別

す日、又、かたらふ人の、うへにものし給ふを、度々よ
〔四十三・ウ〕

びおろすに、せちにことあらば、いかむとあるに、
枯れたる薄の、あるにつけて、

冬がれの、しのゝ小薄、袖たゆみ、まねきもよ

せじ、風にまかせん、上達部、殿上人などに、対面す

る人は、定まりたるやうなれば、うひくしき里人

は、ありなしをだに、しらるべきにもあらぬに、十

月ついたちごろの、いとくらき夜、ふだん、経に、声

よき人々、よむほどなりとて、そなた近き戸口に

二人ばかり、たち出で、聞きつ、物がたりして、

よりふしてあるに、参りたる人のあるを、にげ入
〔四十四・オ〕

りて、局なる人々、呼びあげなどせんも、みぐるし。

くちをしから
ざなりは、口を
しからざるな
りといふべき
を省けるなり。

さばれ、たゞ、をりからこそ。かくてだにといふ。¹⁰⁵

ま一人のあれば、側らにて、聞き居たるに、おとな

しく、しづやかなるけはひにて、物など言ふ。くち

をしからざなり。いま一人は、などとひて、世のつ

ねの、うちつけのけさうびてなども、いひなさず。

世の中の、あはれなることゞもなど、細やかに、い

ひ出で、さすがにきびしう、ひきいるかたは、¹⁰⁶
¹⁰⁷ふ

しぐありて、我も人も、答へなどするを、まだしら

ぬ人の、ありけるなど、めづらしがりて、とみにた
〔四十四・ウ〕

つべくもあらぬほど、星の光りだに見えず、くら

107 106 105
〔御〕たゞ(といふ)
〔御〕り
〔御〕い

きに、うちしぐれつゝ、木の葉にかゝる音の、お

しきを、中々に、えんにおかしき夜かな、月の、くま

なくあかゝらんも、はしたなく、まばゆかりぬべ

かりけり。春秋の事などいひて、時にしたがひ、見

る毎には、春霞おもしろく、空も、のどかにかすみ、

月のおもても、いとあかうもあらず、遠うながるゝ

やうにみえたるに、琵琶のふかう、てう、ゆるらか

にひきならしたる、いといみじく、聞こゆるに、ま

た、秋になりて、月いみしうあかきに、空は霧渡り

〔四十五・オ〕

たれど、手にとるばかり、さやかにすみ渡りたる

に、風の音、虫の声、とりあつめたる、心ちするに、箏

の琴、かきならされたる、平調¹⁰⁸の、吹きすまされた

るは、何の春とおぼゆかし。又、さかと思へば、冬の

夜の、空さへさえ渡り、いみじきに、雪の降り積り、

光りあひたるに、ひちりきの、わなゝきいでたる

は、春秋も、みな、忘れぬかしと、いひつゞつけて、いづ

れにか、御心とゞまるととふに、秋の夜に、心をよ

せて、こたへ給ふを、さのみ同じさまには、いはじ

とて、

〔四十五・ウ〕

あさみどり、花もひとつに、かすみつゝ、おぼ

ろに見ゆる、春のよの月、とこたへたれば、返すくゝ、

な、りなは、な
りなとありし
を、伝写の誤り
にて、な文字、ひ
とつ、書き添へ
たるにはあら
ぬか。

うちずんじて、さは、秋の夜は、おぼしすてつるな
なりな。

今宵より、後の命の、もしもあらば、さは春の

夜を、かたみと思はん、といふに、秋に心寄せたる

人、

人はみな、春に心を、よせつめり、われのみや

見ん、秋の夜の月、とあるに、いみじう興じ、思ひわ

づらひける、けしぎにて、もろこしなどにも、昔よ

〔四十六・オ〕

り、春秋のさだめは、えし侍らざるを、この、かう、

おぼしわかせ給ひけん、御心ども、思ふに、ゆゑ侍

らんかし。わが心のなびき、そのをりの、あはれと

も、おかしとも、思ふ事のある時、やがて、そのをり

あべかめれは、
あるべかるめ
れを省きしな
り。

の、空のけしきも、月も花も、心にそめらるゝにこ

そ、あべかめれ。春秋を、知らせ給ひけんことの、ふ

しなむ、いみじう承らまほしき。冬の夜の月

は、昔より、すさまじき物の例に、ひかれて、侍りけ

るに、またいと寒くなどして、ことにみられざり

しを、齋宮の、御裳着の勅使にて、くだりしに、暁

〔四十六・ウ〕

にのぼらむとて、日頃、ふりつみたる雪に、月のい

とあかきに、旅の空ときへ、思へば、心ほそくおぼ

ゆるに、まかり申しに、参りたれば、よの所にも、似

ず。思ひなしさへ、けおそろしきに、さべき所にめ

して、円融院の御世より、参りたりける人の、いと

いみじく、神さびふるめいたる、けはひの、いとよ

さべきは、さる
べきを省きし
なり。

しふかく、昔¹⁰⁹ふること¹¹⁰も、いひいで、うち泣きなど

して、よう調べたる、琵琶の御ことを、さしいでら

れたりしは、この世の事とも、おほえず、夜の明け

なんも、をしう、京のことも、思ひたえぬばかり、お

〔四十七・オ〕

ぼえ侍りしよりなむ、冬の夜の、雪ふれる夜は、思

ひしられて、火桶などをいだきても、必ず、いで居

てなん、見られ侍る。おまへたちも、必ず、さおぼす

ゆゑ、侍らむかし。¹¹¹さらば、今宵よりは、くらき暗の

夜の、しぐれうちせんは、又、心にしみ侍りなんか

し。斎宮の雪の夜に、おとるべき心ちも、せず、など

いひて、別れにし後は、誰れとしられじと、思ひし¹¹²

を、又の年の八月に、内へ入らせ給ふに、夜もすが

ら、殿上にて、御遊びありけるに、この人の、さぶら

ひけるも、しらず、その夜は、しもにあかして、細殿

〔四十七・ウ〕

のやり戸を、おしあけて、見いだしたれば、暁方の

月の、あるかなきかに、おかしきを見るに、靴の声

きこえて、読経などする人も、有り。読経の人は、こ

のやり戸口に、立ちとまりて、ものなどいふに、答

へたれば、¹¹³ふと思ひ出で、時雨の夜こそ、片時忘

111 110 109
「御」の
「御」と

113 112
こ ふ

れず、こひしく侍れ、といふに、こと長うこたふべ
きほどならねば、

何さまで、思ひ出でけん、等閑の、木の葉にか

けし、時雨ばかりを、ともいひやらぬを、人々、又来

あへば、やがて、すべりいりて、その夜さり、まかで

〔四十八・オ〕

にしかば、もろともなりし人、尋ねて、かへし¹¹⁵た

りしなども、後にぞぎく。ありし時雨の、やうなら

んに、いかで、琵琶の音の、おぼゆるかぎり、ひきて

聞かせんとなん、あるときくに、ゆかしくて、我も

さるべきをりを待つに、更になし。春ごろ、のどや

かなる夕つかた、参りたなりと聞きて、その夜、も

ろともなりし人と、みざりいづるに、とに、人々ま

り、うちにも、例の人々あれば、いでさいていり

ぬ。あの人も、さや思ひん。しめやかなる夕暮を、

おしはかりて、参りたりけるに、騒がしかりけれ

〔四十八・ウ〕

ば、まかづめり。

かしま見て、なるとの浦に、こがれ出づる、心

はえきや、磯のあま人、とばかりにてやみにけり。

あの人からも、いとすくよかに、世の常ならぬ

人にて、その人は、かの人はなども、尋ねとはで過

きぬ。今は昔のよしなし心も、くやしかりけりと

のみ、思ひ知りはて、親の、ものへゐて参りなどせ

で、やみにしも、もどかしく思ひいでらるれば、今¹¹⁶

はひとへに、ゆたかなる勢ひになりて、二葉の人

をも、思ふさまに、かしづきおほしたて、わが身も、
みくらの山に、積み余るばかりにて、後の世まで
（四十九・オ）

の、事をも、思はんと、思ひはげみて、霜月の廿余日、

石山にまゐる。雪うちふりつゝ、道のほどさへ、お

かしきに、逢坂の関を見るにも、昔越えしも、冬ぞ

かすと、思ひ出でらるゝに、そのほども、いとあ

らう吹いたり。

逢坂の、関の山風、吹く声は、昔聞きしに、かは

116
て

らざりけり。関寺の、いかめしう造られたるを、見¹¹⁷

るにも、そのをり、あらづくりの、御顔ばかり、みら

れしをり、思ひ出でられて、年月の過ぎにけるも、
いとあはれなり。打出の浜のほどなど、見しにも
（四十九・ウ）

変はらず。暮れかゝるほどに、まうでつき、ゆやにお

りて、御堂にのぼるに、人声もせず。山風おそろし

うおぼえて、行ひきして、打まどろみたる夢に、中

堂より、御かう給はりぬ。とく、かしこへつげよと、

いふ人、あるに、うち驚きたれば、夢なりけりと思

ふに、よき事ならんかと思ひて、行ひあかす。ま

117
守

ぐし給へるは、
ぐし給へるぞ
といふべき、ぞ。
文字を省けり。

たの日も、いみじく、雪ふりあれて、宮にかたらひ

聞こゆる人の、ぐしたまへると、物がたりして、心ほ

そさを慰む。三日さぶらひて、まかでぬ。そのかへ

〔五十・オ〕

る年の、十月廿五日、大嘗会、御禊とのゝしるに、初

瀬の精進、始めて、その日、京を出づるに、さるべき

人々、一代に、一度の、見物にて、田舎世界の人だに、

みるものを、月日おほかり。その日しも、京をふり

出で、いかむ、¹¹⁸いと、¹¹⁹ことのくるほしく、ながれて

の、物語とも、なりぬべき、事やなど、はらからなる

人は、言ひはらだてど、ちごどもの、親なる人は、い

119 118
と
〔御〕も
〔御〕も
ものくるほしく

かにもく、心にこそあらめとて、いふに、したが

ひて、いだししたつる心ばへも、あはれなり。ともに¹²⁰

行く人々も、いといみじく、物ゆかしげなるは、い

〔五十・ウ〕

とほしけれど、もの見て、何にかはせん。かゝるを

りに、まうでん志を、さりともし、おぼしなん。必

ず、仏の御しるしを見んと、思ひ立ちて、その暁、京

をいづるに、二条の大路を、¹²¹おし渡りて、いくに、さ

よにみあかしたせ、¹²²ともの人々 淨衣姿なるを、

そこら、さじぎどもに、移るとて、いきちがふ、馬も

122 121 120
る ナシ
〔御〕しも
き
〔御〕き

車も、かち人も、あれば、なぞ、¹²³ことやすからず、いひ

驚き、あざみ笑ひ、あざけるものども、あり。良頼

の、兵衛のかみと申し、¹²⁴人の、家のまへを、すぐれ

ば、それ、さじきへ渡り給ふなるべし。門ひろうお

〔(五十一・オ)〕

しあけて、人々、たてるが、あれば、物まうで人なめ

りな。月日しもこそ、世に多かれと、笑ふ中に、いか

なる心ある人にか、一時が目をこやして、何にか

はせん。いみじくおぼしたちて、仏の御徳、必ず見

給ふべき、人にこそあめれ。よしなしかし。物みで、

かうこそ、思ひたつべかりけれど、まめやかに、い

ふ人、ひとりぞある。みちけんそうならぬ、さきに¹²⁵

と、夜深う出でしかば、立ちおくれたる、人々も、待

ち、いとおそろしう、深き霧をも、すこしはるけん

とて、法性寺の大門に、たちとまりたるに、田舎よ

〔(五十一・ウ)〕

り、物見に、のぼる、ものども、水の流るゝやうにぞ

見ゆるや。すべて、道もさりあへず。物の心しりげ

もなき、あやしのわらはべまで、ひきよきて、行き

過ぐるを、車を驚きあさみたること、かぎりなし。

是等をみるに、げに、いかに出でたちし、道なりと

も、おぼゆれど、ひたぶるに、仏をねんじ奉りて、う

124 123
こ ナシ
ナシ
「御」く、
こ ナシ

125
御き

ぢのわたりにいきつきぬ。そこにも、猶しも、こな

たぎまに、渡りするものども、立ちこみたれば、船

の、かちとりたる男ども、舟をまつ、人の数しらぬ

に、心おごりしたるけしきにて、袖をかいまくり

〔五十二・オ〕

て、顔にあてゝ、竿におしかゝりてとみに舟もよ

せず。うそぶいて、みまはし、いといみじう、すみた

るさまなり。むごにえ渡らで、つくぐと、みるに、紫

の物がたりに、うぢの宮の、むすめどもの、事ある

を、いかなる所なれば、そこにしも、住ませたるな

らむと、ゆかしく思ひし所ぞかし。げに、おかしき

所哉と、思ひつゝ、からうじて、渡りて、殿のさぶら

う所の、うち殿を、いりてみるにも、うきふねの女

君の、かゝる所にや、ありけんなど、まづ思ひ出で

らる。夜深く出でしかば、人々、こうじてやひろう

〔五十二・ウ〕

ちと云ふ所に、とゞまりて、物くひなどするほど

にしも、供なるものども、かうみやうの、くりこま

山には、あらずや。日も、くれがたに、なりぬめり。ぬ

したち、調度、とりおはさうせよやといふを、いと

物おそろしうきく。その山、越えはてゝ、にへのゝ

他のほとりへ、いきつきたるほど、日は、山の端に

ねたると思ひ
ては、ねたるこ
とと思ひてと
いふべきこと
の文字を省け
るなり。

かゝりにたり。今は、やどとれとて、人々あがれて、

やど求むる所、はしたにて、いとあやしげなる、下

司の、小家なんあると、いふに、いかゞはせんとして、

そこに宿りぬ。みな人々、京にまかりぬとて、あや

〔五十三・オ〕

しの男、ふたりぞ居たる、その夜も、いもねず。此男、

いでいりしありくを、奥のかたなる、女ども、など

かくしありかるゝぞと、とふなれば、いなや、心も

しらぬ人を、やどし奉りて、かまはしも、ひきぬか

れなば、いかにすべきぞと、思ひて、えねで、まはり

ありくぞかすと、ねたると思ひていふ。きくに、い

と、むくくしくをかし。つとめて、そこをたちて、東

大寺によりて、をがみ奉る。いそのかみも、まこと

にふりにける¹²⁷事、思ひやられて、むげにあれはて¹²⁸

にけり。その夜、山のべといふ所の、寺にやどりて、

〔五十三・ウ〕

いと苦しけれど、経すこしよみ奉りて、打ちやすみ

たる夢に、いみじくやむごとなく、きよらなる女

の、在¹²⁹はするに、まゐりたれば、風いみじう吹く。み

つけて、うちゑみて、何しにおはしつるぞと、とひ

給へば、いかでかは、参らざらんと、申せば、そこは、

うちにこそあらんとすれ。はかせの命婦をこそ、

よくかたらはめと、宣ふと思ひて、嬉しくたのも

しくて、いよく、ねんじ奉りて、初瀬川など、うち過

129 128 127
に ナシ
に ナシ
お 〔御〕お

れうかい一本
には、うかゞい
ともあり、孰れ
にても、意さだ
かならず。伝写
の誤りもやあ
るへからん。

130
か

きて、その夜 御寺にまうでつきぬ。はらへなどし

て、のぼる。三日さぶらひて、暁にまかでむとて、う

〔(五十四・オ)〕

ちねぶりたるに、よさりみだうの方より、すは、稲

荷よりたまはる、しるしの杉よとて、物を、なげい

づるやうに、するに、うち驚きたれば、夢なりけり。

暁よぶかく出で、えとまらねば、ならざかのこ

なたなる家を、尋ねてやどりぬ。是も、いみじげな

る小家なり。こゝは、けしきもある所なめり。ゆめい¹³⁰

ぬな、れうかいのことあらんに、あなかしこ、おひ

え騒がせ給ふな。いきもせで、ふさせ給へと、云ふ

131
す

をきくにも、いといみじう、わびしくおそろしう

て、夜をあかすほど、千歳をすぐすこゝちす。から

〔(五十四・ウ)〕

うじて、明けたつほどに、これは、ぬす人の家なり。¹³¹

あるじの女、けしきあることをしてなむ、ありけ

るといふ。いみじう、風の吹く日、宇治の渡りを、す

るに、網代いと近う、こぎよりたり。

音にのみ、きゝわたりこし、宇治川の、網代の

浪も、けふぞかぞふる、二三年、四五年、へだてたる

ことを、しだいもなく、かきつゞくれば、やがて、つゞ

きだちたる、修行者めきたれど、さにはあらず。年

月へだゝれる事なり。春頃、鞍馬に籠りたり。山ぎ

は、霞わたり、のどやかなるに、山のかたより、わづ

〔五十五・オ〕

かに、ところなど、ほりもてくるも、をかし。いづる

道は、花も、みな、散りはてにければ、何ともなきを、

十月ばかりに、もうづるに、道のほど、山のけしき、

此頃は、いみじうぞ、まさる物なりける。山のは、錦

を、ひろげたるやうなり。たぎりて、流れゆく水、水

晶を、ちらすやうに、わきかへるなど、いづれにも、

すぐれたり。まうでつきて、僧坊にいきつきたる

ほど、かきしぐれたる、紅葉の、たぐひなくぞ、みゆ

るや。

奥山の、紅葉の錦、外よりも、いかにしぐれて、ふ

〔五十五・ウ〕

かくそめけむ、とぞみやらるゝ。二年ばかりあり

て、又、石山に籠りたれば、夜もすがら、雨ぞ、いみじ

くふる。旅居は、雨、いとむつかしき、ものときゝて、

しとみおしあけて、みれば、有明の月の、谷のそこ

さへ、曇りなくすみわたり、雨と聞こえつるは、木

のねより、水の流るゝ音なり。

谷川の、流れは雨と、聞こゆれど、外よりけな

る、有明の月、また、初瀬にまうづれば、はじめに、こ

よなく物たのもし。処々に、まうけなどして、いき

もやらず。山城の国、はゝその杜などに、紅葉、いと

〔五十六・オ〕

おかしきほどなり。初瀬川わたるに、

初瀬川、立ち帰りつゝ、尋ねれば、杉のしるし

も、このたびやみむ、と思ふも、いとたのもし。三日

さぶらひて、まかでぬれば、例のならざかのこな

たに、小家などに、此度は、いとるみひろければ、え

やどるまじうて、野中に、かりそめに庵つくりて、

すゑたれば、人はたゞ、野にゐて、夜を明かす。草の

上に、むかばきなどを、うちしきて、うへに、蓆をし

きて、いとはかなくて、夜をあかす。かしらも、しとゞ

に、露おく。暁がたの月、いといみじく、すみ渡りて、
〔五十六・ウ〕

よにしらず、おかし。

ゆくへなき、旅の空にも、おくれぬは、都にて

みし、有明の月、何事も、心になはぬ事も、なき

まゝに、かやうに、たちはなれたる、物まうでをし

ても、道のほどを、おかしとも、苦しとも、みるに、お

のづから、心も慰め、さりととも、たのもしう、さしあ

たりて、嘆かしなど、おぼゆることども、ないまゝ

に、たゞ、をさなき人々を、いつしか、思ふさまに、し

たてゝ見んと、思ふに、年月の、過ぎ行くを、心もと

なく、たのむ人だに、ひとのやうなる、よろこびし
〔五十七・オ〕

ては、とのみ、思ひ渡す心ち、たのもしかし。古、いみ

じうかたらひ、よるひる、歌など、よみかはしゝ人

の、ありくゝても、いと、昔のやうにこそあらね、たえ

ずいひ渡る。越前守のよめにて、くだりしが、かき

たえ、音もせぬに、からうじて、たより尋ねて、これ

より、

たえざりし、思ひも今は、たえにけり、こしの

渡りの、雪のふかさに、といひたる、返りに、

白山の、雪の下なる、さざれ石の、中の思ひは、

消えん物かは、やよひのついたち頃に、西山の、奥

〔五十七・ウ〕

なる所に、いきたる、人目も見えず、のどくくと、霞み

わたりたるに、あはれに、心細く、花ばかり咲きみ

だれたり。

里遠み、あまり奥なる、山路には、花みにとて

も、人こざりけり、世の中、むつかしうおぼゆる頃、

うづまきに籠りたるに、宮に、かたらひ聞ゆる

人の、御もとより、文ある、返りごとくきこゆるほど¹³²

に、鐘の音の、聞こゆれば、

しげかりし、うき世のことも、忘れず、入相

の鐘の、心ばそさに、とかきて、やりつ。うらくとの

〔五十八・オ〕

どかなる宮にて、同じ心なる人、三人ばかり、物語

などして、まかで、又の日、つれぐなるまゝに、こ

ひしう、思ひ出でらるれば、二人の中に、

袖ぬるゝ、あら磯浪と、しりながら、ともにか

づきを、せしぞこひしき、ときこえたれば、

あら磯は、あされど何の、かひなくて、うしほ

返りごととは、かへしといふべき所なり。

いきたるの下には、に。文字を省けり。

にぬるゝ、あまの袖かな、いま一人、

みるめおふる、浦にあらば、あら磯の、浪ま

かぞふる、あまもあらじを、同じ心に、かやうに、い

ひかはし、世の中の、うきもつらきも、おかしきも、

〔五十八・ウ〕

かたみに、いひかたらふ人、筑前にくだりてのち、

月の、いみじうあかきに、かやう成りし夜、宮に参

りて、あひては、つゆまどろまず、ながめあかいし

ものを、恋しく思ひつゝ、寝いりにけり。宮に、参

りあひて、うつゝにありしやうにて、有るとみて、

うち驚きたれば、夢なりけり。月も、山の端近うな

りにけり。さめざらましをと、いとゞながめられ

て、

夢さめて、ねぎめの床のうくばかり、こひき

とつげよ、西へ行く月、さるべきやうありて、秋の

〔五十九・オ〕

ころ、和泉にくだるに、よどといふよりして、道の

ほどの、おかしうあはれなること、いひつくすべ

うも、あらず。たかはまといふ所に、とゞまりたる

夜、いと暗きに、夜、いたうふけて、舟のかぢの音、き

こゆとふなれば、あそびの、来たるなりけり。人々

興じて、舟に、さしつけさせたり。遠き火のひかり

に、ひとへの袖、長やかに、扇さしかくして、歌うた

ひたる、いとあはれにみゆ。又の日、山の端に、日の

かゝるほど、住吉の浦をすぐ。空もひとつに、霧渡

とふなれば、
といふなれば、
を約めたるな
り。

れる、松の梢も、海のおもても、波のよせくる、渚の
〔五十九・ウ〕

ほども、ゑにかきても、およぶべきかたなう、おも
しろし。

いかにいひ、何にたとへて、かたらまし、秋の

ゆふべの、住吉の浦、と見つゝ、つなで引き過ぐる

ほど、かへり見のみ、せられて、あかずおぼゆ。冬に

なりて、のぼるに、おほえといふ浦に、舟に、のりた¹³³

るに、其夜、雨風、岩も動くばかり、ふりふゞきて、紙

さへなりて、とゞろくに、浪の、立ちくる音なひ、風

の、吹きまどひたるさま、おそろしげなること、命

133
〔御〕つ

かぎりつと、思ひまどはる。岡のうへに、舟を、ひき
〔六十・オ〕

あげて、夜をあかす。雨は、やみたれど、風なほふき

て、船いざさず。ゆくへもなき岡のうへに、五六日

をすぐす。からうじて風、いささかやみたるほど、

舟のすだれ、まきあげて、見渡せば、夕汐、たゞみち

に、みちくるさま、とりもあへず。入江の田鶴の、声

をしまぬも、おかしく見ゆ。くにの人々、集まりきて、

其夜、この浦を、いさせ給ひて、いしづに、つかせ¹³⁴

給へらましかば、やがて、此御舟、なごりなく、なり

なましなどいふ、心細う聞こゆ。

134
て ナシ

荒るゝ海に、風よりさきに、舟出して、いしづ
〔六十・ウ〕

の波と、きえなましかば、世の中に、とにかくに心

のみつくすに、宮づかへとても、ことはひとすぢ

に、つかうまつりつゞ、かはやいかゞあらん、時々

立ちいでは、何なるべくも、なかめり。年はやゝさ¹³⁵
136

だ過ぎ行くに、わか／＼しきやうなるも、つきなう、

おぼえなげかるゝうちに、身の病ひ、いと重くな

りて、心にまかせて、物まうでなどせし事も、えせ

ず、なりたれば、わくらばの立ち出でも、たえて、な

がらふべき心ちも、せぬまゝに、幼き人々を、いか

このわたり誤
脱ありげなれ
ば、異本どもか
れこれと見合
せたれども、こ
はと覚ゆるも、
なければ、今は、
さてやみつ。

にも／＼、わがあらんよに、みおく事もがたと、ふ
〔六十一・オ〕

しおき、思ひなげき、頼む人の、よろこびのほどを、

心もとなく、待ちなげかるゝに、秋に成りて、待ち

いでたるやうなれど、思ひしにはあらず。いと、本

意なく、くちをし。親のをりより、立ち帰りつゝみ

し、東路よりは、近きやうに、聞こゆれば、いかゞは

せん。さて、¹³⁷ほどもなく、くだるべき事ども、急ぐに、

かどでは、むすめなる人の、新らしく、渡りたる所

に、八月十余日にす。後の事は、知らず。そのほどの

ありさまは、物騒がしきまで、人、多くいきほひた

136 135
は く

137
に

り。廿七日にくだるに、男なるは、そひてくだる。紅
〔六十一・ウ〕

のうちたるに、萩のあを、紫苑のおりものゝ指貫

きて、たちはきて、しりにたちてあゆみいづるを、¹³⁸

それも、おり物のあを¹³⁹に、緋色の指貫、狩衣きて、ら

うのほどにて、馬にのりぬ。のゝしりみちて、くだ

りぬる後、こよなう、つれぐなれど、いといたう、遠

きほどならずと、きけば、さきぐのやうに、心細く

などは、おぼえであるに、おくりの人々、又の日、帰

りて、いみじうきらくしうて、くだりぬなど、いひ

て、此暁に、いみじくおほきなる、人だまの、たちて、

139 138
を ナシ

あをにびいろ

京さまへなむきぬると、かたれど、ともの人など
〔六十二・オ〕

のにこそはと思ひ、ゆゝしきさまに、思ひだによ

らむやは。いまはいかで、此若き人々、おとなびさ

せんと、思ふより外の、事なきに、かへる年の、四月

にのぼり来て、夏秋も過ぎぬ。九月廿五日より、わ

づらひいでゝ、十月五日に夢のやうに、みないて

思ふ心ち、世の中に、またたぐひある事とも、おぼ

えず。初瀬に、鏡奉りしに、ふしまろび、なきたる影

の、みえけんは、是にこそはありけれ。嬉しげなり

けん影は、きしかたも、なかりき。今行く末は、あべ

いやうもなし。廿三日、はかなくも、煙になす夜、去

〔六十二・ウ〕

年の秋、いみじくしたて、かしづかれて、うちそひ

てくだりしを、見やりしを、いと黒き衣のうへに、

ゆゝしげなる物をきて、車のともに、なくく、あゆ

み出で、行くを、見いだして、思ひいづること、ち、

すべて、たとへむかたなきまゝに、やがて、夢路に

まどひてぞ思ふに、其人やみにけんかし。昔より、

よしなき物語、歌の事をのみ、心にしめで、よるひ

る思ひて、行ひをせましかば、いとかゝる夢の世

をば、見ずもやあらまし。初瀬にて、まへのたびは、

稲荷より給ふ、しるしの杉よとて、なげ出でられ

〔六十三・オ〕

しを、いでしまゝに、稲荷に、まうでたらましかば、

かゝらずやあらまし。年頃、天照御神をねんじ奉

れど、みゆる夢は、人の御めものとして、内わたりに

あり。帝、後の、御影に、かくるべきさまをのみ、夢と

きもあはせしかども、其事は、ひとつかなはで、や

みぬ。たゞ、悲しげなりとみし、鏡の影のみ、たがは

ぬ、あはれに、心うし。かうのみ、心に、物のかなふ方

なうて、やみぬる人なれば、功德も、つくらずなど

して、たゞよふ。さすがに、命は、憂きにも、たえず、

ながらふめれど、後の世も、思ふにかなはずぞ、あ

〔六十三・ウ〕

らんかしとぞ、うしろめたきに、たのむ事ひとつ

ぞありける。天喜三年、十月十三日の夜の夢に、ゐ

たる所の屋のつまの庭に、阿弥陀仏たち給へり。

さだかには、みえたまはず。霧ひとへ、隔たれるや

うに、すきてみえ給ふを、せめて、たえまに見奉れ

ば、蓮花の座の、つちをあがりたる、高さ三四尺、仏

の御たけ、六尺ばかりにて、金色に、ひかりかゞや

き給ひて、御手、かたつかたをば、ひろげたるやう

に、いま、かたつかたには、ゐんをつくり給ひたる

を、こと人の目には、見つけ奉らず。我一人、見奉り

〔六十四・オ〕

て、さすがに、いみじくけおそろしければ、すだれ

のもと、近くよりても、え見奉らねば、仏、さは、此度

は、かへりて後、¹⁴¹むかへに¹⁴²来んと、宣ふ声、わが耳、ひ

とつに聞きゐて、人は、え聞きつけずとみるに、う

ち驚きたれば、十四日なり。この夢ばかりぞ、後の

たのみとしけるを、人もなどひと所にて、朝夕み

るに、かうあはれに悲しきことの、後は、所々にな

りなどして、誰れも、みゆること、かたうあるに、い

と暗い夜、六はらにあなる、をひの来たるに、めづ

らしうおぼえて、

〔六十四・ウ〕

月も出で、闇にくれたる、姨捨に、何とて¹⁴³

こよひ、尋ねきつらん、とぞいはれにける。懇にか

たらふ人の、かうて後、音づれぬに、

今は世に、あらしものとや、思ふらん、あはれ

なくく、なほこそはふれ。十月ばかり、月の、いみ

じうあかきを、なくくながめて、

ひまもなき、涙にくもる、心にも、あかしとみ

ゆる、月の影かな、年月は、すぎばかりゆけど、夢の¹⁴⁴

やうなりしほどを、思ひいづれば、心ちもまどひ、

目もかきくらすやうなれば、其ほどの事は、また、
〔六十五・オ〕

さだかにもおぼえず。人々は、みな、外に、すみあが

れて、故郷にひとり、いみじう心ほそく、悲しくて、

ながめあかしわびて、久しうおとづれぬ人に、¹⁴⁵

茂りゆく、よもぎが露に、そほぢつゝ、人にと

はれぬ、音のみぞなく、あまなる人なり。

世のつねの、やどのよもぎに、思ひやれ、そむ

きはてたる、庭のくさむら、

和文教科書六之巻 終

〔六十五・ウ〕

明治十九年十二月十七日版權免許

和文 第三帙

第一帙 定価金五十銭

第二帙 定価金五十銭

第三帙 定価金五十銭

第四帙 定価金五十銭

同 二十年一月 出版

同二十一年十一月十六日訂正印刷再版 第五帙（ママ）

編者 下田歌子

東京四谷尾張町九番地

発行者 宮川保全

東京日本橋区通塩町八番地

印刷者

中央堂

右 同 所

「裏表紙」

くぼ・たかこ / 下田歌子記念女性総合研究所 専任研究員

Shimoda Utako's *Japanese Textbooks Volume 6:*
The Sarashina Diary — Annotations and Reprints

KUBO Takako

The distinguishing characteristic of this body of work is Shimoda Utako's emphasis on education for women and the learning of traditional Japanese *waka* poetry and texts or writings composed entirely of *kana* characters. This compilation, *Textbook of Japanese Writings*, constitutes the first step toward clarifying Shimoda's educational stance and truly offers a glimpse of the expression of her determination.

“*Fujivara no Teika Jibitsu Gyobutsu*,” which is considered the finest text in *The Sarashina Diary*, is known for its out-of-order pages due to an error in binding during the collation process. *Textbook of Japanese Writings* contains texts from *The Sarashina Diary* that were included before anyone pointed out the error, and it presents the contents in their original order, along with revisions and annotations. In the context of existing research, this document is a remarkable pioneering achievement that is worthy of attention, as it focuses on *The Sarashina Diary* before the text was revised to correct the out-of-order pages due to the binding error. Furthermore, the textbook format further enhances this book's value.